

特別史跡

大湯環状列石

発掘調査報告書(22)

2006. 3

鹿角市教育委員会

## 序

大湯環状列石は、野中堂、万座環状列石を主体とする縄文時代の遺跡であり、その特異な形態、規模から昭和26年には国史跡、さらに31年には特別史跡に指定されております。

鹿角市は、市民の誇りでもある、この貴重な文化遺産を保存するとともに、整備、活用するため、昭和59年から環状列石周辺の発掘調査を継続してまいりました。

これらの調査結果を基に、平成10~14年度には、第Ⅰ期環境整備事業として、野中堂・万座環状列石周辺107,000m<sup>2</sup>の環境整備とガイダンス施設である大湯ストーンサークル館の建設を行っております。

環状列石の洗浄・保存処理により、野中堂環状列石と万座環状列石は今後も露出展示が継続できるようになり、さらには配石遺構、掘立柱建物の復元や地形復元、植栽により、縄文時代の雰囲気が感じられるすばらしい史跡となりました。

本年度からは、第Ⅲ期環境整備計画地の資料収集のため、史跡東側の発掘調査に移行しました。その結果、一本木後ロ配石遺構群の南側に接して新たに12基の配石遺構が発見され、このゾーンの遺構の広がりや性格を推察できる資料を得ることができました。

本報告書はその成果をまとめたものであります。本書が大湯環状列石はもとより全国で発見が続いている環状列石の研究の資料として、多くの方々にご利用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書作成にご指導、ご協力いただきました関係機関、各位に厚く感謝を申し上げます

平成18年3月

鹿角市教育委員会

教育長 織田育生

## 例　　言

- 1 本報告書は、平成17年度に国庫補助金を得て実施した特別史跡大湯環状列石第22次発掘調査の成果をまとめたものである。調査の概要については現地説明会、大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」で発表してきたが、本報告書を正式なものとする。
- 2 本報告書の執筆と編集は、生涯学習課秋元信夫、藤井安正、三浦貴子が行った。
- 3 石器類の石質鑑定は秋田県立横手高等学校教頭 錦田健一氏にお願いした。
- 4 土層や土器などの色調の記載には「新版 標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
- 5 本報告書に使用した地形図並びに図面は次の通りである。
  - ・国土地理院発行25,000分の1「毛馬内」
  - ・鹿角市教育委員会作成の1,000分の1「特別史跡大湯環状列石現況地形図」
  - ・鹿角市所蔵の「陸中国鹿角郡大湯村字一本木後 第三拾三」、「陸中国鹿角郡大湯村字万座 第三拾六」、「陸中国鹿角郡大湯村字野中堂 第三拾七」の地籍図
- 6 遺物の実測、拓本、トレースなどの一連の整理作業は調査員、調査補助員、整理作業員が行った。
- 7 本報告書に使用した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。
- 8 本報告書の文中において用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用されているものについては簡略している場合もある。
- 9 図版、表などで下記のような記号、スクリーントーンを使用した。

S X (S) …配石遺構、S K …土坑、S X (f) …焼土遺構、S M …道路状遺構  
■…遺構確認面下の層                    ■…焼土
- 10 発掘調査並びに本報告書作成にあたり、下記の方々からご指導、ご助言をいただきました。心から感謝申し上げます。(敬称略、順不同)

斎藤 忠、村越 潔、小林達雄、富樫泰時、沢田正昭、熊谷常正、安村二郎、阿部義平、  
本中 真、小野健吉、市原富士夫、岡村道雄、遠藤正夫、工藤清泰、稻野裕介、宮沢賢一

# 本文目次

序	第V章 分析と考察
例言	1 配石遺構群について..... 46
本文目次	2 道路状遺構について..... 63
図版・写真図版・表目次	第VI章 調査のまとめ..... 68
第I章 遺跡の環境	参考文献..... 69
1 遺跡の位置と立地..... 1	写真図版..... 70
2 周辺の地形・地質..... 2	報告書抄録
3 周辺の遺跡..... 3	
4 遺跡の層序..... 6	
第II章 調査の概要	
1 調査要項..... 9	
2 調査の目的..... 10	
3 調査の方法..... 11	
4 調査の経過..... 11	
第III章 A <sub>4</sub> 区の検出遺構と出土遺物	
1 縄文時代	
(1) 配石遺構..... 16	
(2) 土坑..... 26	
(3) 焼土遺構..... 27	
(4) 遺構外出土遺物..... 35	
① 土器..... 35	
② 石器..... 36	
③ 土製品..... 43	
2 歴史時代	
(1) 道路状遺構..... 43	
第IV章 A <sub>5</sub> 区の検出遺構と出土遺物	
1 縄文時代	
(1) 焼土遺構..... 45	
(2) 遺構外出土遺物..... 45	

## 図版・写真・表目次

図 版 目 次		
第1図	遺跡位置図	1
第2図	発掘調査区の地質柱状図	2
第3図	大湯環状列石周辺の遺跡	4
第4図	調査区基本層序(1)	7
第5図	調査区基本層序(2)	8
第6図	調査区位置図	12
第7図	トレーナー配置図・遺構分布図	13
第8図	遺構の分布詳細図	15
第9図	配石遺構実測図(1)	16
第10図	配石遺構実測図(2)	18
第11図	配石遺構実測図(3)	20
第12図	配石遺構実測図(4)	21
第13図	配石遺構実測図(5)	22
第14図	配石遺構実測図(6)	24
第15図	配石遺構実測図(7)	25
第16図	配石遺構実測図(8)	26
第17図	土坑実測図	26
第18図	焼土遺構実測図(1)	28
第19図	焼土遺構実測図(2)	30
第20図	焼土遺構実測図(3)	32
第21図	焼土遺構実測図(4)	34
		写真図版目次
第22図	出土土器(1)	37
第23図	出土土器(2)	38
第24図	出土土器(3)	39
第25図	出土土器(4)	40
第26図	出土土器(5)・土製品	41
第27図	出土土器破片分布状況	42
第28図	出土石器	42
第29図	出土石器分布状況	43
第30図	道路状遺構実測図(1)	44
第31図	一本木後口配石遺構群	48
第32図	配石遺構形態分類図	49
第33図	一本木後口配石遺構実測図(1)	50
第34図	一本木後口配石遺構実測図(2)	51
第35図	一本木後口配石遺構実測図(3)	52
第36図	一本木後口配石遺構実測図(4)	53
第37図	一本木後口配石遺構実測図(5)	54
第38図	一本木後口配石遺構実測図(6)	55
第39図	一本木後口配石遺構実測図(7)	56
第40図	一本木後口配石遺構実測図(8)	57
第41図	一本木後口配石遺構実測図(9)	58
第42図	一本木後口配石遺構実測図(10)	59
第43図	一本木後口配石遺構群 A・B分布図	61
第44図	道路状遺構実測図(2)	65
第45図	大湯環状列石周辺の 地籍切絵図	66
第46図	大湯環状列石周辺の古道	67
P L 1	大湯環状列石(1)	70
P L 2	大湯環状列石(2)	71
P L 3	調査区近景(1)	72
P L 4	調査区近景(2)	73
P L 5	調査区近景(3)	74
P L 6	調査区近景(4)	75
P L 7	配石遺構(1)	76

P L 8	配石遺構(2).....	77	P L 39	一本木後口配石遺構群(7).....	108
P L 9	配石遺構(3).....	78	P L 40	一本木後口配石遺構群(8).....	109
P L 10	配石遺構(4).....	79	P L 41	一本木後口配石遺構群(9).....	110
P L 11	配石遺構(5).....	80	P L 42	道路状遺構(2).....	111
P L 12	配石遺構(6).....	81			
P L 13	配石遺構(7).....	82		表 目 次	
P L 14	配石遺構(8).....	83		第 1 表 大湯環状列石周辺の遺跡.....	5
P L 15	配石遺構(9).....	84		第 2 表 一本木後口配石遺構観察表(1).....	60
P L 16	配石遺構(10).....	85		第 3 表 一本木後口配石遺構観察表(2).....	62
P L 17	配石遺構(11).....	86			
P L 18	配石遺構(12).....	87			
P L 19	土坑・焼土遺構(1).....	88			
P L 20	焼土遺構(2).....	89			
P L 21	焼土遺構(3).....	90			
P L 22	焼土遺構(4).....	91			
P L 23	焼土遺構(5)・道路状遺構(1).....	92			
P L 24	出土土器(1).....	93			
P L 25	出土土器(2).....	94			
P L 26	出土土器(3).....	95			
P L 27	出土土器(4).....	96			
P L 28	出土土器(5)・土製品.....	97			
P L 29	出土石器.....	98			
P L 30	昭和59年度調査区(A 1 区).....	99			
P L 31	昭和60年度調査区(A 2 区).....	100			
P L 32	昭和60年度・61年度調査区 (A 2・3 区).....	101			
P L 33	一本木後口配石遺構群(1).....	102			
P L 34	一本木後口配石遺構群(2).....	103			
P L 35	一本木後口配石遺構群(3).....	104			
P L 36	一本木後口配石遺構群(4).....	105			
P L 37	一本木後口配石遺構群(5).....	106			
P L 38	一本木後口配石遺構群(6).....	107			

# 第Ⅰ章 遺跡の環境

## 1. 遺跡の位置と立地

遺跡の位置する鹿角市は、秋田県の北東部に位置し、北は小坂町、南は仙北市、西は大館市、東は岩手県八幡平市と接している。

米代川の上流域にあたり、東西の山々と盆地内の段丘地形及び沖積低地よりなる。この盆地を北上する米代川は、十和田鶴木地区で南流する小坂川、西流する大湯川と合流し、川幅を広げ、その流れを変え、大館盆地へと西流する。

米代川やその支流の両岸に発達した段丘上には縄文時代から近世に至る数多くの遺跡がある。特別史跡大湯環状列石もその一つであり、大湯川と豊真木沢川によってつくられた南西方に向延びた長さ5.6km、幅0.5~1.0km、標高150~190mの通称「中通台地」と呼ばれる舌状台地のほぼ中央部に位置している。遺跡周辺の標高は172~182m、北側水田との比高は約60mである。

本遺跡の南西3.5kmには国立公園十和田湖への南玄関口であるJR花輪線十和田南駅が、同3.6kmには東北縦貫自動車十和田インターがある。

本年度の調査区の一つであるA4区は、史跡の東部で、昭和59~61年に調査したA1~A3区の南西侧隣接地であり、野中堂環状列石の北東100~215mの距離にある。同区南側にある小



第1図 遺跡位置図

沢が北側に延び、浅い沢状となっている。以前は普通畠であったが、公有化後は草地となっている。また、A5区はA4区の南側の台地縁辺部と斜面部で、台地縁辺部はほぼ平坦、現況は原野である。

## 2. 周辺の地形・地質

鹿角市内の地形は、東西の山地、盆地内の段丘地形及び沖積低地よりなる。

東側の山地は800~1,100mの標高で、四角岳(1,003m)、川投岳(1,122m)、五ノ宮岳(1,115m)などを中心とする急峻な壯年期の山地である。主として新第三紀中新世の火山破屑層からなるが、それらを貫いて石英安山岩や安山岩も分布している。

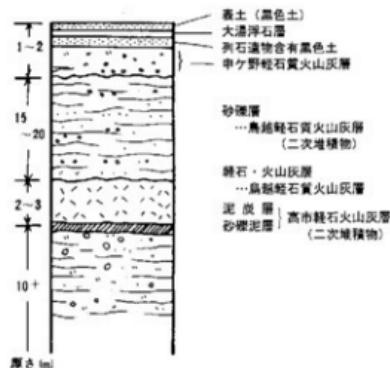
一方、西側の山地は、標高400~600mの丘陵性の山地で、東側同様新第三紀中新世の火山破屑岩を主とするが、大葛層、大滝層などで砂岩や泥岩が発達している。

鹿角盆地はこれらの山地に囲まれ、台地、段丘、低地が至る所にみられる。特に北部には十和田火山由来のシラス台地が分布し、東部や南部は脊梁山脈を源とする河川によって形成された扇状地地形が特徴である。

盆地内の段丘は、大きく4段に分けられる。最高位の面は浦志内川や歌内川などが盆地に注ぐ付近に扇状地状にみられる面で、柏木森面と呼ばれている。標高270~330m、傾斜がやや緩しく、かなり解析されている。次の2段目は、標高180~250mで、南部で扇状地状の地形を残すものの、大里以北では厚い火碎流堆積物に覆われ、火碎流台地としての形状を示している。関上面や鳥越面と呼ばれ、盆地内ほぼ全域に分布している。本遺跡もこの段丘上にある。3段目は、標高180~250mで、主として米代川左岸に沿い、尾去沢から松館にかけて分布している。松館面と呼ばれ、夜明島川や黒沢川などによる扇状地の解析された面と考えられている。4段目は米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で、大里面と呼ばれている。標高は150~155mと低く、上部は砂礫層を主としている。

沖積低地は、大湯川、米代川及びその支流である草木川、根市川、豊真木沢川などの現河床沿いの低地で、標高は100~120m、主として砂礫層からなる。

発掘調査地周辺の地質は、大きく分けて4枚の火山灰層よりなる。最下部は高市軽



第2図 発掘調査区の地質柱状図

石質火山灰の二次堆積物で、軽石や砂礫からなり、地層中に平行ラミナやクロスラミナが発達している。この上に薄い泥炭層をはさみ、厚さ2~3mの鳥越軽石質火山灰層が、その上に水の作用によって堆積した鳥越火山灰層の二次堆積物である軽石質段丘砂礫層が15~20m重なる。さらに、この上に風化の進んだ大型の軽石礫を含む串ヶ野軽石質火山灰層が1~2m重なる。最上部は黒褐色土や黒色土で、その間に大湯浮石層がみられる。大湯浮石層については、青森県一帯に分布する十和田降下火山灰と一連のものであり、約1,000年前の降下火山灰（十和田a降下火山灰）と考えられている。

### 3. 周辺の遺跡

鹿角市内には416の遺跡がある。大湯環状列石周辺の分布密度も高く、特に縄文時代の遺跡の多さが目につく。第3図は大湯環状列石周辺の縄文時代中期後葉から後期の遺跡の分布図である。これまでに発掘調査された遺跡や列石との関連が考えられる遺跡について、その概要を記述する。

黒森山麓堅穴群遺跡<sup>(1)</sup>は、昭和45年に十和田町教育委員会によって調査が行われている。縄文時代中期末の堅穴住居跡5軒他が確認され、遺構外からは後期の土器も出土している。

下内野II遺跡<sup>(2)</sup>は、平成11年に携帯電話の電波塔建設に伴い、約100戸が調査された。その結果、縄文時代中期後葉の堅穴住居跡6軒、フ拉斯コ状土坑7基が確認され、大規模な集落跡と考えられている。遺構外から後期の土器も多量出土しており、後期の遺構の存在も予想される。

下内野III遺跡<sup>(3)</sup>は昭和60年頃に発見された遺跡で、遺跡の種別は配石遺構となっている。平成元年の遺跡詳細分布調査時には畠境に抜き取られたと考えられる川原石が山積みとなっていた。小清水遺跡<sup>(4)</sup>からも抜き取られたと考えられる川原石が畠境に積まれていたのを確認している。いずれの遺跡にも、環状列石や配石遺構の存在が考えられる。

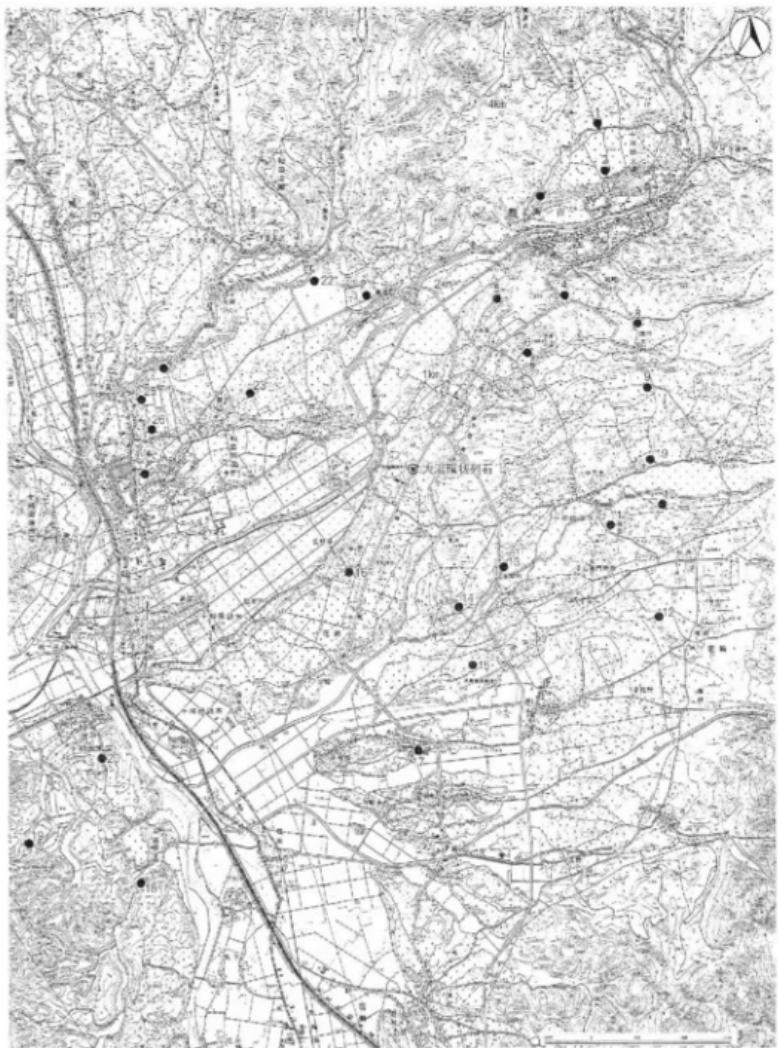
上屋布II遺跡<sup>(5)</sup>、堤尻I・II遺跡<sup>(6)</sup>、串ヶ野V遺跡<sup>(7)</sup>は大湯環状列石と同じ台地上にあり、同時期の遺跡であることから、関連が考えられる。

草木A<sup>(8)</sup>遺跡は、昭和49年に広域農道建設に先立って調査されている。この調査では遺構は検出されていないが、後期後半の土器が出土している。調査地点の後背には平坦な畠地が広がっており、集落の存在も予想される。

高屋館跡<sup>(9)</sup>は、昭和63~平成元年に農免農道建設に伴い、秋田県教育委員会が発掘調査を行っている。環状列石と掘立柱建物群が発見されており、大湯環状列石との関連が注目されている。

下砂沢遺跡<sup>(10)</sup>は、平成元年に工業団地造成に伴って発掘調査を行い、配石遺構2基他が検出されている。

(秋元信夫)



第3図 大湯環状列石周辺の遺跡

第1表 大湯環状列石周辺の遺跡

No.	遺跡名	所 在 地	種 別	時 期
1	黒森山麓堅穴群	鹿角市十和田大湯字上内野 100-1	集落跡	縄文時代中期末葉
2	下内野Ⅱ	〃 大湯字下内野 43	集落跡	縄文時代中期末葉
3	下内野Ⅲ	〃 大湯字室ノ沢口、下内野	配石遺構	縄文時代後期
4	小清水	〃 大湯字小清水 7	配石遺構	縄文時代後期
5	上屋布Ⅱ	〃 大湯字上屋布 25、26 他	遺物包含地	縄文時代後期
6	堤尻 I・II	〃 大湯字堤尻 3-1	遺物包含地	縄文時代後期
7	和町 I	〃 大湯字和町 117-2 他	遺物包含地	縄文時代後期
8	根 市	〃 大湯字根市 20-25	遺物包含地	縄文時代後期
9	松 舟	〃 草木字松舟 19、20 他	遺物包含地	縄文時代後期
10	崩 原	〃 草木字崩原 24-1	遺物包含地	縄文時代後期
11	保田Ⅱ	〃 草木字保田 49-2	遺物包含地	縄文時代後期
12	高間館	鹿角市花輪字善提野 96-97 他	遺物包含地	縄文時代後期
13	草木A	鹿角市十和田草木字小坂 12 他	遺物包含地	縄文時代後期～晚期
14	丸館IV	〃 草木字丸館 44-2 他	遺物包含地	縄文時代後期
15	土 木	鹿角市花輪字土木 7-2 他	遺物包含地	縄文時代中期～後期
16	申ヶ野V	鹿角市十和田鎌木字申ヶ野 2-1	遺物包含地	縄文時代後期
17	平元館	鹿角市花輪字源平 6-1	遺物包含地	縄文時代後期、平安時代
18	高屋越跡	〃 字猿ノ沢、字大田谷地	環状列石	縄文時代後期、中世
19	板橋Ⅱ	鹿角市十和田末広字板橋 32 他	遺物包含地	縄文時代後期
20	上ノ野IV	〃 末広字上野 70-1	遺物包含地	縄文時代中期～後期
21	吹越Ⅱ	〃 山根字吹越 12	遺物包含地	縄文時代後期
22	下砂沢	〃 山根字上ノ平 1-6	配石遺構	縄文時代前期～後期
23	竹 林	〃 岡田字竹林 11-1	遺物包含地	縄文時代後期
24	湯坂Ⅱ	〃 毛馬内字湯坂 37-1	遺物包含地	縄文時代後期
25	寺ノ上Ⅲ	〃 毛馬内字寺ノ上 30	遺物包含地	縄文時代後期
26	寺ノ上 I	〃 毛馬内字寺ノ上 6	遺物包含地	縄文時代後期
27	柏崎越跡	〃 毛馬内字柏崎、字二ノ丸	遺物包含地	縄文時代後期～晚期、中世

#### 4. 遺跡の層序

ここでは、表土から申ヶ野輕石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層までについて記載する。それ以下の地層については、先に述べたとおりである。

第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、暗褐色土である。そのほとんどが耕作土で植物根の混入がみられる。

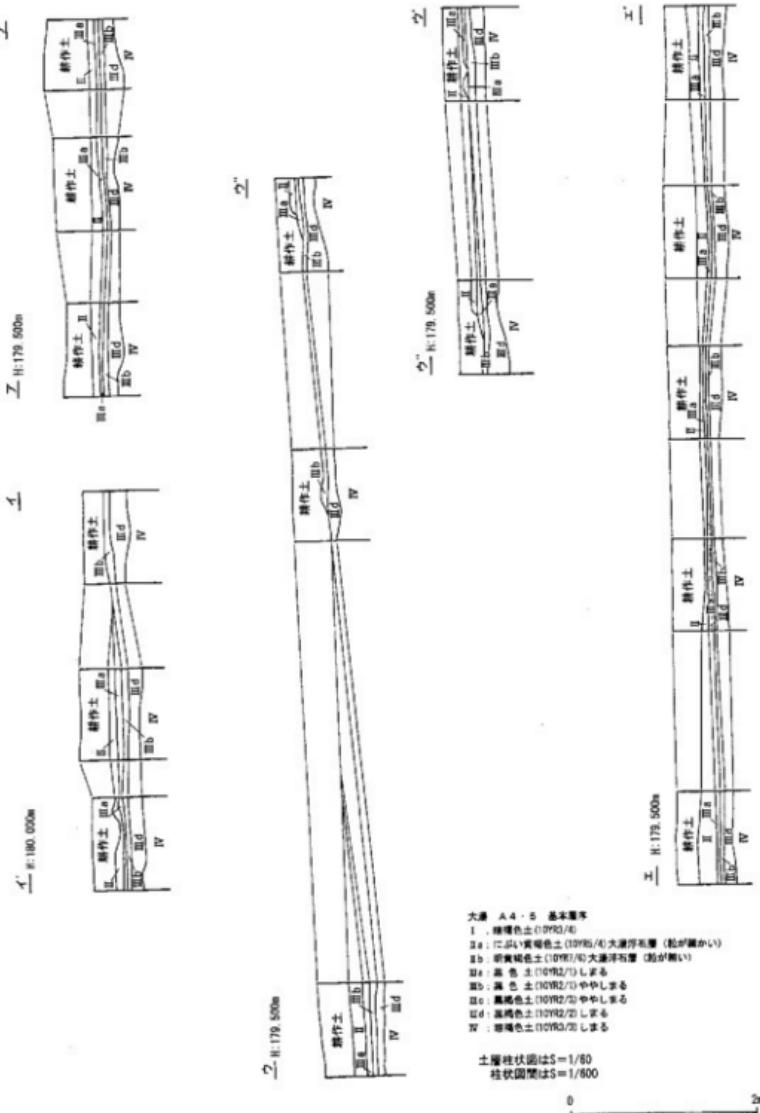
第Ⅱ層はにぶい黄橙色や明黄褐色の浮石層で、大湯浮石層と呼ばれている。青森県や岩手県北部に堆積している十和田a降下火山灰と一連のものであり、約1,000年前の十和田湖の噴火によって噴き上げられた降下軽石と考えられている。本層は、浮石粒の大きさ、色調等から2層（Ⅱa、Ⅱb）に分層できる。

第Ⅲ層は大湯浮石層下から地山直上の暗褐色土（IV層）までの黒色または黒褐色の土層である。色調や堅さなどから4層（Ⅲa～Ⅲd）に細分される。

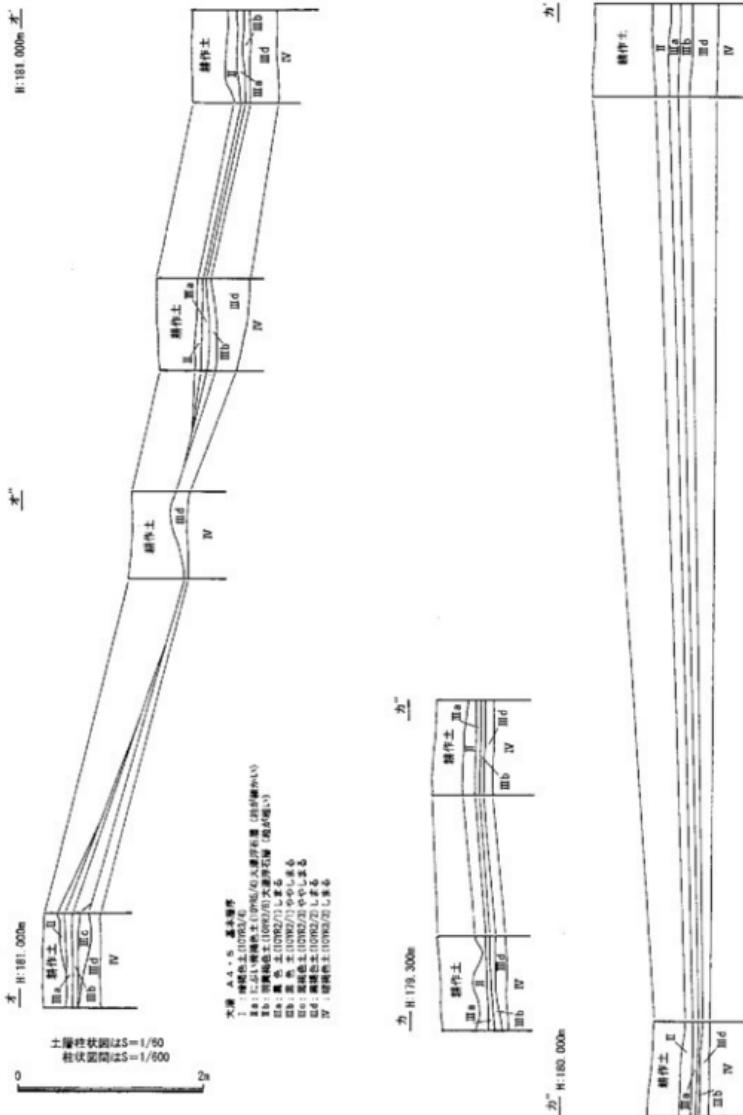
第Ⅳ層は地山直上（下位火山灰）の層で、暗褐色で、若干粘性があり、しまりのある層である。

第Ⅴ層は先に述べたとおり、申ヶ野火山灰層と考えられる黄褐色の火山灰層である。本層は上位に堆積する大湯浮石層に対比し下位火山灰、あるいは関東ロームに相当するところからロームと呼ばれているものである。本報告書では、本層をV層以外に下位火山灰や地山と表現している。

（三浦貴子）



第4図 調査区基本層序(1)



第5図 調査区基本層序(2)

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 調査要項

1. 遺跡名 特別史跡大湯環状列石（遺跡番号：123）
2. 調査地 鹿角市十和田大湯字一本木後口 ほか
3. 発掘調査面積 A 4 区 1,492.89m<sup>2</sup>  
A 5 区 53.9m<sup>2</sup>  
計 1,546.79m<sup>2</sup>
4. 調査期間 発掘調査 平成17年8月10日～平成17年11月14日  
整理・報告書作成 平成17年11月15日～平成18年3月31日
5. 調査主体者 鹿角市教育委員会
6. 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課  
主事 三浦貴子
7. 調査参加者 調査指導 畠 一郎  
(秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室副主幹)  
調査員 鎌田健一(秋田県立横手高等学校 教頭)  
大里勝藏  
(元鹿角市出土文化財管理センター館長)  
調査補助員 松田隆史、柳沢和仁  
発掘調査作業員  
石川三郎、大森勝次、加賀ユキ子、黒沢珠子、黒沢文子、黒沢陸雄、  
佐藤一祐、関イサ、高橋秀明、田中美千栄、兎沢寛馳子、  
兎沢サツ子、兎沢優子、成田則子、成田由紀子、三浦茂雄、  
湯瀬トキ、湯瀬晴子、柳沢大樹、柳沢ヤス、柳沢千晶、柳館愛子  
整理作業員  
黒沢文子、田中栄子、福島美紀子、三上晴香
8. 事務局 鹿角市教育委員会 生涯学習課  
課長 相馬田富  
班長 児玉和子  
主幹 秋元信夫  
主査 藤井安正(本務 大湯ストーンサークル館主査)

主事 上田 学  
主事 田村信仁（本務 大湯ストーンサークル館主事）  
主事 三浦貴子

9. 協力機関 文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター、大湯ストーンサークル館

## 2. 調査の目的

大湯環状列石周辺遺跡の発掘調査は、昭和48～51年の分布調査によりその存在が知られていた各地区の様々な遺構の形態、性格、構築時期及び環状列石との関連の解明を主目的に、昭和59年から継続されている。昭和59年から61年は一本木後口配石遺構群、昭和62年から63年は万座環状列石の北西～西侧隣接地、平成元年から2年には同列石の北側台地縁辺部、平成3年には万座配石遺構群の調査を行い、同年で上記の目的をほぼ達成している。

また、平成2年3月に周辺遺跡のほとんどが特別史跡に追加指定され、3年度から追加指定地の公有化を開始、4年3月には「特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想」をまとめるに至った。このようなことから、平成4年からは史跡の環境整備を進めるための直接的な資料の収集を目的に発掘調査が行われることとなった。

環境整備の年次計画を考慮し、発掘調査は第Ⅰ期環境整備計画地である万座環状列石、野中堂環状列石周辺の順に行うこととし、平成4年から10年に万座環状列石隣接地及び同列石北側台地縁辺部、11年から13年にかけ野中堂環状列石隣接地の発掘調査を実施している。

なお、これらの調査結果を基に、第Ⅰ期環境整備を平成10～14年度に行っている。

平成14年からは第Ⅱ期環境整備計画地である史跡西部に調査地を移し、16年で同地区的調査を終了している。

このため、本年度からは第Ⅲ期環境整備計画地である一本木後口地区に調査地を移すこととした。本地区では先に述べたとおり、昭和59～61年の調査（A1～A3区）で一本木後口配石遺構群が確認され、同配石遺構群が南西側と北東側に延びると考えられていた。このため、本年度は同配石遺構群の南西側への広がりを確認するため、A3区の南西側隣接地を調査区のひとつとした。同地区は地形復元も計画している地区であることから、配石遺構群予想される地点の他、小沢部にも十字にトレチを設定した。

また、竪穴住居跡等の遺構の有無を確認するため野中堂環状列石の台地縁辺部に3列のトレチ、土器捨て場、水場遺構等の確認のため斜面に1箇所の坪堀り箇所を設定した。

（秋元信夫）

### 3. 調査の方法

グリッドについては、第1次調査以来のグリッドを延長した。すなわち、N-49°-Wを基準線とした5m四方のグリッドとし、グリッドの名称は、アルファベットと算用数字を組み合わせ、西側の杭をもってグリッド名とした。

発掘は、遺跡の保存を第一に考え、トレンチ方式を基本とし、必要に応じて拡張することとした。

表土については重機で除去、II層以下については人力による分層発掘とし、極力上面での遺構確認に努めた。

確認された遺構については、発見順に番号を付した。ただし、配石遺構については、第1号から3号配石遺構までは発見順に付したが、第10号配石遺構については基本的に分布位置すなわち北東側から南西側の順になるような番号とした。なお、遺構の精査については、後に追調査ができるように必要最小限にとどめた。

遺構の実測図の作成については、グリッド杭を利用し、簡易造り方測量を行い、縮尺1/20、1/10で図化した。遺物については、1点ずつ図化し、レベル測量後に取り上げた。

写真撮影については、小型一眼レフカメラ2台とデジタルカメラを使用し、調査の過程や遺物出土状況などを記録した。

### 4. 調査の経過

特別史跡大湯廬状列石の第22次発掘調査は、平成17年8月10日より開始し、1,546.79m<sup>2</sup>の調査を終了したのは11月14日である。以下、調査日誌に基づき、調査経過の概要を述べる。

8月10日、作業員への作業説明、連絡事項伝達の後、トレンチの設定を行い、重機により、表土除去の終了した第1トレンチからII層以下を分層的に掘り下げ、各層上面での遺構確認を行った。盆休み明けの18日には同トレンチほぼ中央より配石遺構の一部(S X (S) 01)を発見、全容を表すため、トレンチを南東側に1.5m拡幅する。

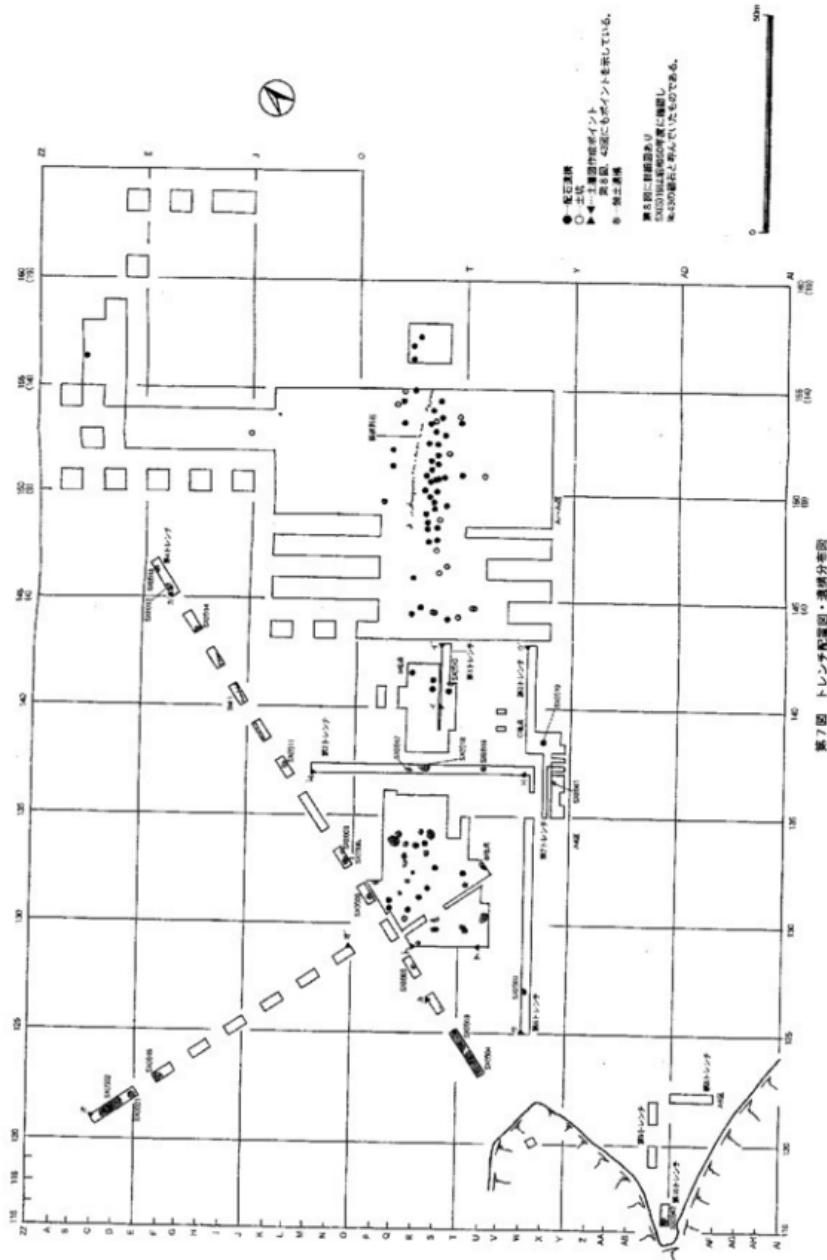
同配石の発見により、従来から発見されていた一本後ロ配石遺構群が南西側に伸びることが明らかとなつたため、19日には今年度の発掘区(A 4区)と以前の発掘区(A 3区)との位置関係を明確にする目的で、同調査区で発見されていた第41号、43号配石遺構の再表出をした。また、第2、3トレンチの調査にも着手した。

8月23日には第1トレンチ周辺をボーリング調査し、配石遺構の有無を確認した。その結果、第1トレンチの北西10m付近で数個の石の感触があったため、第1トレンチを北西方向にも拡張することとし、この周辺をa地点と呼ぶこととした。

8月24日からは、a地点の調査と併行し、小沢部に十字に設定した第4、5トレンチの調査

第六图 银杏区位图





も行った。両トレンチからは次々と焼土遺構が発見された。また29日には第5トレンチ東部のR-131グリッド、T-132グリッドよりそれぞれ1基の配石遺構（SX(S)14、03）が確認された。このため第5トレンチ東部を北東側及び南西側に拡張することとし、この周辺をb地点とした。

9月15日には、昭和50年の調査で坪掘り地点No.43で確認されている配石遺構を再確認するため、同調査報告書調査実施図から予想される地点に第7トレンチを設定し、調査を開始する。

拡張していたb地点からは、9月19日までに新たに2基の配石遺構（SX(S)11、13）が確認されている。

草刈りの終了していた台地縁辺部については、20日に3本のトレンチ（第8～10トレンチ）を設定し、第8トレンチより調査を開始した。

9月26日には第4トレンチ北部で確認された道路状遺構の実測及び写真撮影を行う。また、28日には第6トレンチで確認された焼土遺構の実測、写真撮影を行い、同トレンチの調査を終了した。

9月30日には拡張していたa地点から新たに配石遺構1基（SX(S)10）、10月18日にはb地点西部から配石遺構2基（SX(S)15、16）さらに10月21日にはa地点から配石遺構1基（SX(S)18）が確認された。

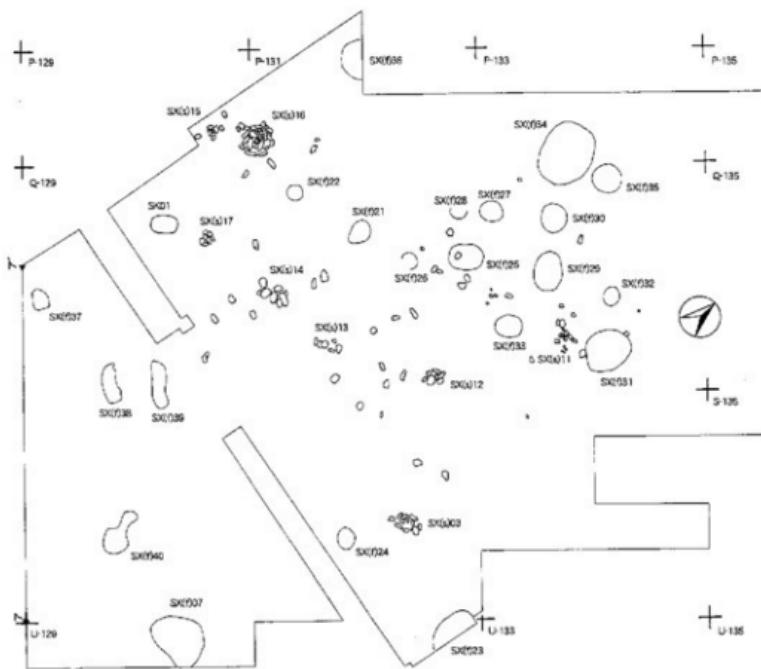
10月24日、湧水地上の斜面、坪掘り箇所の調査を行う。なお、b地区においては新たな配石遺構1基（SX(S)17）が確認される。

昭和50年の坪掘地点が当初予想したトレンチで確認されず、その南東、北東に調査トレンチを延ばした結果、10月26日によくやく当初設定した第7トレンチの北東5m程の地点で確認された。なお、本日で予定範囲の粗掘と遺構確認を終了した。

10月27日から31日には配石遺構の平面図の作成、同日から11月2日には第1号配石遺構下土坑の調査、11月4日、7日に遺跡の基本層序図を作成、11月14日に発掘区全体写真を撮影し、現場での全ての調査を終了した。

なお、10月13日、14日には特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会を開催し、発掘調査ならびに環境整備について指導と助言をいただいた。また、11月13日には現地説明会を開催、50名の見学者があった。なお、18年1月22日には、大湯ストーンサークル館講座「縄文に学ぶ」において本年度の調査成果を発表した。

（三浦貴子）



### 調査地点 b 遺構分布図



調查地點 a 調據分布圖

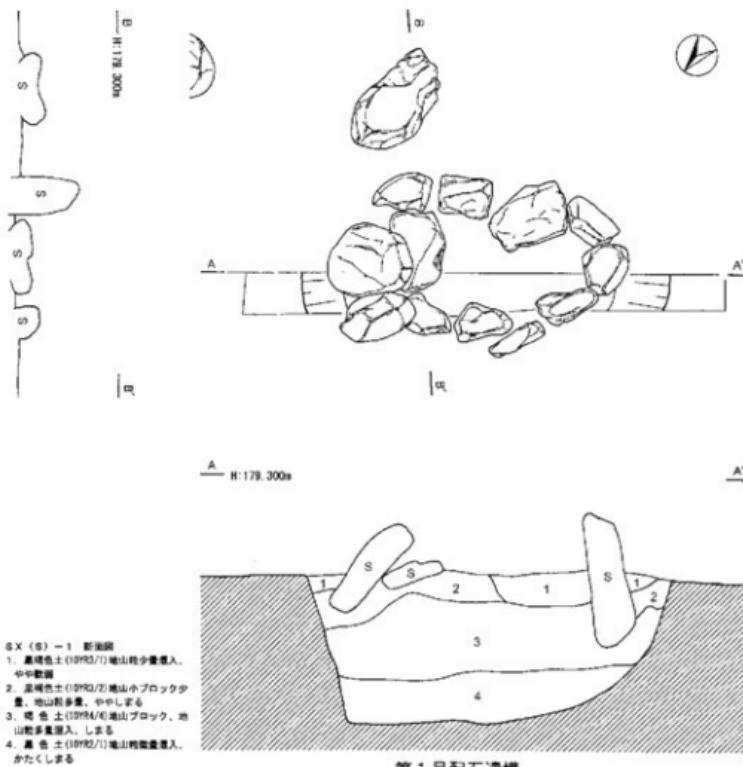
## 第三章 A<sub>4</sub>区検出遺構と出土遺物

### 1. 縄文時代

A<sub>4</sub>区において、確認された縄文時代の遺構は配石遺構13基、土坑1基、焼土遺構40基である。

#### (1) 配石遺構（第9図～第16図）

A<sub>4</sub>区において、調査区中央部a地点・b地点を中心とし13基の配石遺構が検出された。



第9図 配石遺構実測図(1)

### 第1号配石遺構（第9図）

調査区東側、a 地点の S-140 グリッドに位置する。II層下位において複数の石を確認し、III d 層面において配石全体が検出された。南東側や北東側の一部の立石が耕作等によって斜めになっている。配石は、石を立てて楕円形を作り、その内側に扁平な石を並べている。配石部の規模は長軸132cm、短軸80cmを測る。配石を構成する石には27cm～59cmの大きさのものを使用している。配石の長軸方向はN-52° -Wである。形態から、本遺構は I a 類に分類されると考えられる。

また、配石部を崩さないように幅約20cmのトレンチによる下部土坑の精査を行った結果、長軸153cm、深さ65cmの下部土坑を確認した。小トレンチによる一部精査のため短軸の規模は不明だが、土坑の平面形は楕円形と考えられる。底面は錐底状とみられ、堆積土には地山ブロックを含む黒褐色土や黒色土がみられ、人為堆積である。

配石部分ならびに下部土坑から遺物の出土はみられなかったが、周辺の出土遺物や層位から構築時期は縄文時代後期と考えられる。

### 第2号配石遺構（第10図）

調査区東側、a 地点の Q-141～142 グリッドに位置する。I層下位で2個の石を確認し、III d 層までに5個の石が確認された。このうち、南西側の2個の石は耕作などによって動かされている。東側の石は動かされることなく残っていることから、本来の配石構築位置は東側である可能性が高く、南西側の石は東側から動かされたものと考えられる。

本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物や層位から縄文時代後期と考えられる。

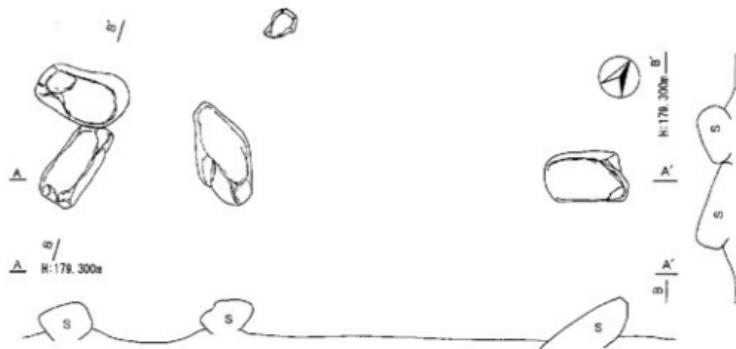
### 第3号配石遺構（第10図）

調査区中央部、b 地点の T-132 グリッドに位置する。II層除去時点で立石を確認し、III d 層面において配石全体が検出された。配石部は、西側に3個の石を立て、東側、南東側には石を立て並べて楕円形の配石を構成している。また、内側には扁平な石を並べている。このような形態から、本遺構は I a 類に分類されると考えられる。配石の規模は、長軸135cm、短軸83cmを測る。長軸方向はN-71° -Eである。

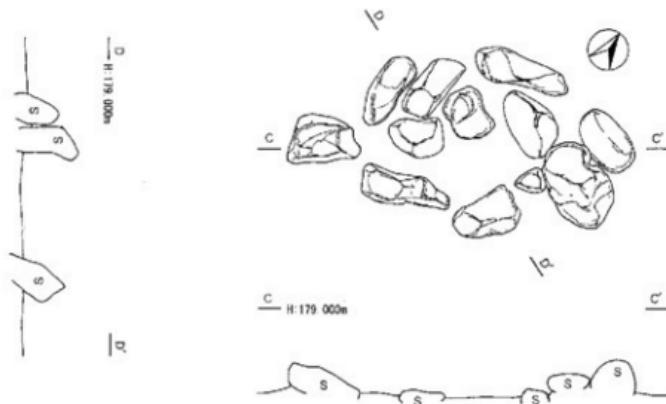
本遺構から遺物は出土していないが、層位より縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

### 第10号配石遺構（第11図）

調査区東側、a 地点の R-140 グリッドに位置する。II層下位で立石の一部を確認し、III d 層で配石全体が検出された。配石部は、南側、南東側、北西側に1個ずつ石を立て、その内側に細長い3個の石を立て並べている。規模は長軸73cm、短軸59cmを測る。外側に立てた石には30cm大のものが使用され、内側に立て並べられた石は20cm～41cmで、細長いものが使われている。配石の長軸方向はN-48° -Wである。形態から、本遺構は I b 類に分類される。



第2号配石遺構



第3号配石遺構

第10図 配石遺構実測図(2)



本遺構から出土した遺物はなく、構築時期は明確にできないが、周辺の出土遺物や層位より縄文時代後期と考えられる。

#### 第11号配石遺構（第11図）

調査区中央部 b 地点のR-133グリッドに位置する。II層除去後に配石の一部を確認し、III d 層において配石全体が検出された。本遺構は配石の一部が耕作等の搅乱により動かされており、配石の構成を明確にすることはできなかったが、東側に下部土坑とみられる楕円形のプランをみることができ、そのまわりに扁平な石を立て並べている状態を確認することができた。このことから、配石の形態は II a 類の可能性が考えられる。配石を構成する石には12cm～34cmのものが使用されていた。

本遺構から出土した遺物はないが、層位より縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

#### 第12号配石遺構（第12図）

調査区中央部 b 地点のR-132グリッドに位置する。II層中位において立石の一部を確認し、III d 層面において配石全体が検出された。配石部は、細長い石が楕円形に立てられ、それぞれ斜めに交差しているが、これは立石が倒れたことによるものと考えられ、本来の構成は立石が楕円形に配置され、内側に扁平な石を置いたものと考えられる。このことから、配石の形態は I a 類に分類されると考えられる。配石の規模は長軸105cm、短軸82cmを測る。配石の長軸方向はN-13° - Eである。

本遺構からは遺物は出土していないが、層位より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

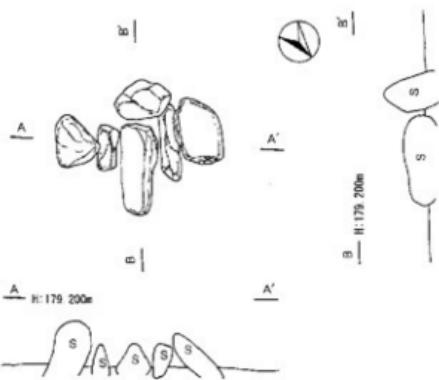
#### 第13号配石遺構（第12図）

調査区中央部 b 地点のR-131グリッドに位置する。II層上面において立石の一部を確認し、III d 層下位において配石全体が検出された。配石部は、中央部が一部搅乱を受けているものの、大きく動かされてはいない。立石が楕円形を形作り、内側には扁平な石を置いている状態が確認できることから本遺構の形態は I a 類に分類されると考えられる。配石の規模は、長軸120cm、短軸57cmを測る。配石の長軸方向はN-91° - Eである。

本遺構から遺物は出土していないが、周辺の出土遺物や層位より縄文時代後期以前に構築されたものと考えられる。

#### 第14号配石遺構（第13図）

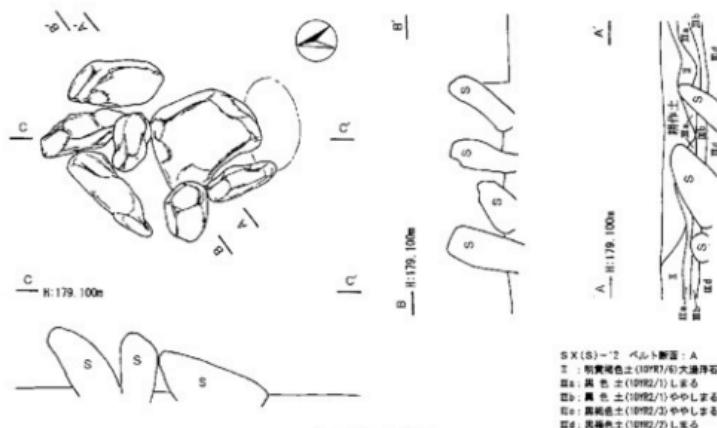
調査区中央部 b 地点のR-131グリッドに位置する。II層上面において立石の一部を確認し、III d 層面において配石全体が検出された。配石部は、耕作により一部動かされており、立石が斜めになっている部分もみられるが、立石で楕円形を構成し、内側に扁平な石を並べていることから I a 類に分類されると考えられる。配石の規模は長軸140cm、短軸90cmを測る。配石は23cm～57cmの石で構成されている。配石の長軸方向はN-73° - Wである。



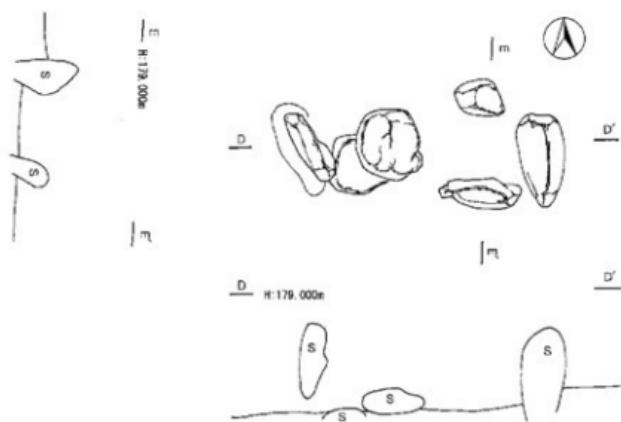
第10号配石造構



第11図 配石造構実測図(3)

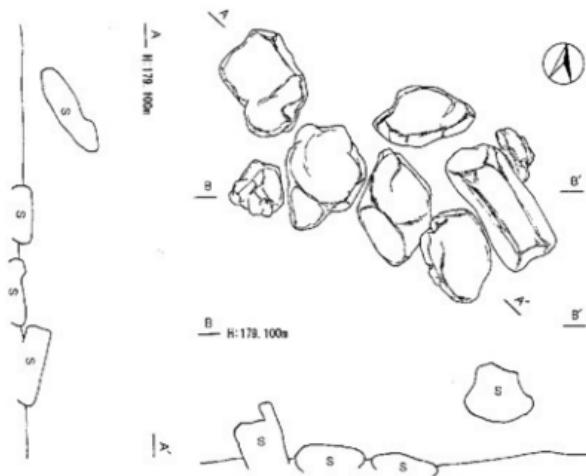


第12号配石造構

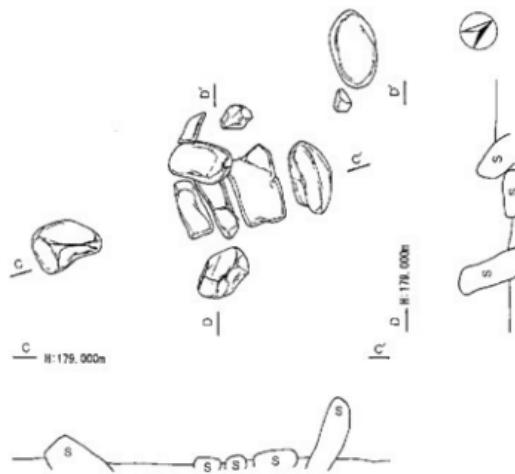


第13号配石造構

第12図 配石造構実測図(4)



第14号配石遺構



第15号配石遺構



第13図 配石遺構実測図(5)

本遺構からは遺物は出土しないが、層位より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

#### 第15号配石遺構（第13図）

調査区中央部 b 地点の P-130 グリッドに位置する。II 層除去面において立石の一部を確認し、III d 層面において配石全体が検出された。配石部は、北側、西側、南東側、南側に 1 個ずつ石を立て、内側に扁平な石を 4 個並べている。規模は長軸 125cm、短軸 65cm を測る。配石を構成している石には 25cm～35cm のものが用いられている。形態から、本遺構は I a 類に分類される。配石の長軸方向は N-18° - E である。

本遺構から遺物は出土しないが、構築時期は層位より縄文時代後期と考えられる。

#### 第16号配石遺構（第14図）

調査区中央部 b 地点の P-131 グリッドに位置する。II 層上面において石を 1 個確認し、III d 層面において配石全体が検出された。配石部は円形で、縁辺部に細長い石を立て並べ、内側に小さな石や細長い石を並べている。縁辺部に立て並べられている石には 81cm～114cm のものが使用され、内側に並べられている石には 20cm 大～80cm 大のものが使われている。配石の規模は、165cm×150cm を測る。形態から、本遺構は I c 類に分類されると考えられる。

本遺構から遺物の出土はみられないが、周辺の出土遺物や層位により縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

#### 第17号配石遺構（第15図）

調査区中央部 b 地点の Q-130 グリッドに位置する。II 層除去時点において石の頭を確認し、III d 層面において配石全体が検出された。配石部は細長い石を立てて梢円形に配置しており、内側に石を 1 個配置している。内側の石は置かれているものか立てられているものか確認することができなかった。配石を構成する石には 40cm 大のものが使用されている。配石の規模は長軸 70cm、短軸 60cm を測る。下部土坑は長軸 88cm、短軸 72cm を測る。形態から、本遺構は I a 類か I b 類に分類される。配石の長軸方向は N-6° - W である。

本遺構から遺物は出土していないが、周辺の出土遺物や層位により縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

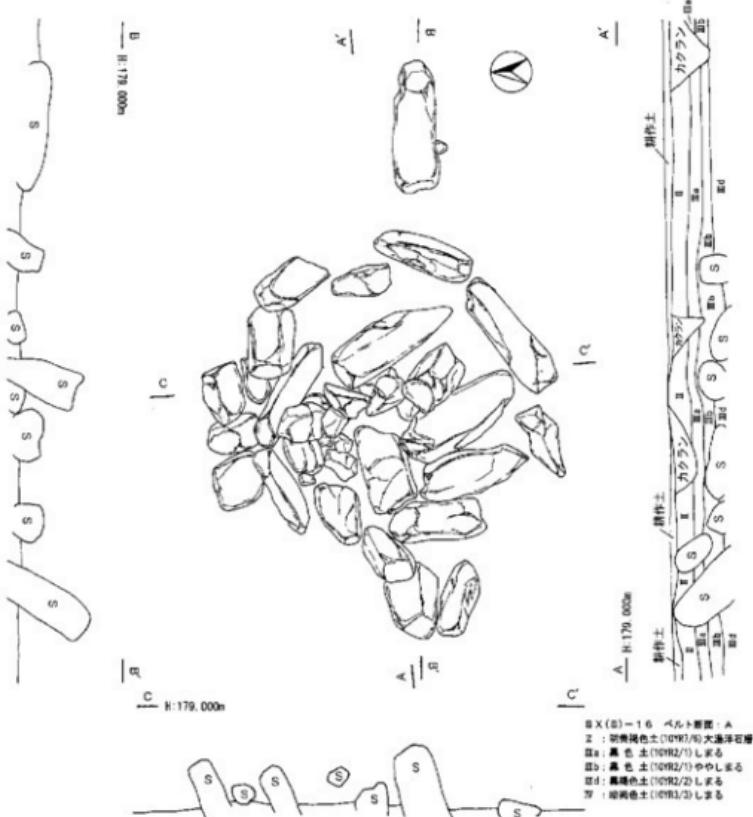
#### 第18号配石遺構（第15図）

調査区東側、a 地点の R-141 グリッドに位置する。II 層除去時において 3 個の石を確認し、III d 層面において全体を確認した。配石部は 4 個の石が点在するのみであるが、周辺には石の抜き取り痕と思われる梢円形の攪乱があることから、配石とした。検出された石の規模は 41cm～61cm を測る。

本遺構から遺物は出土していないが、層位より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

### 第19号配石遺構（第16図）

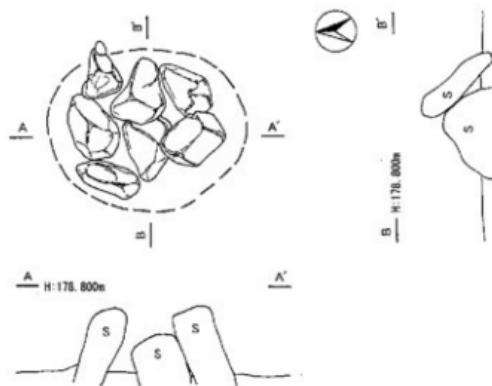
調査区南東側、c地点のW-138グリッドに位置する。表土除去時において配石の一部を確認し、III d層において配石全体を確認した。位置、形態から昭和50年の試掘によって確認されたNo.43配石であると考えられる。配石の縁辺部に石を立て、内側に扁平な石を並べていることから I a 類に分類されると考えられる。配石の規模は、長軸 (130) cm、短軸 (94) cmを測る。



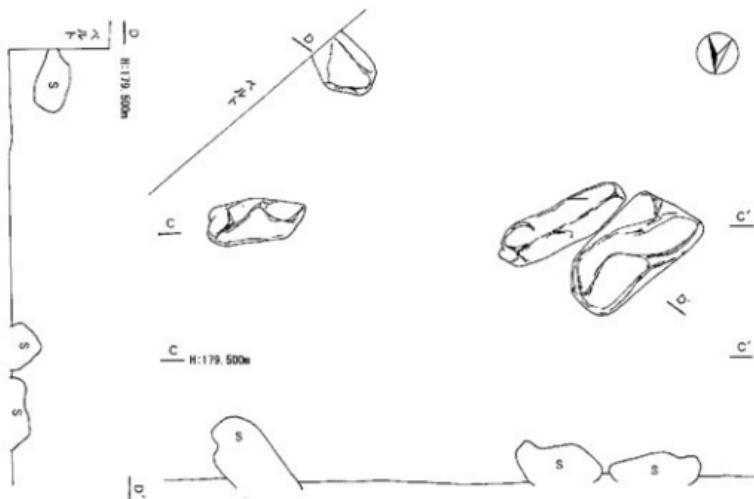
第16号配石遺構



第14図 配石遺構実測図(6)



第17号配石遺構



第18号配石遺構

0 1m

第15図 配石遺構実測図(7)



第16図 配石遺構実測図(8)

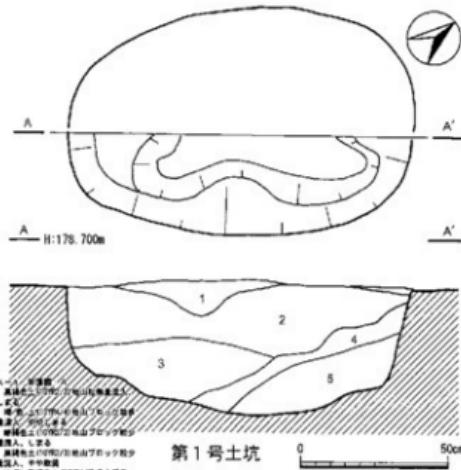
また、配石の長軸方向はN-14°-Wである。配石を構成する石の規模は28cm~52cmを測る。本遺構から遺物は出土していないが、層位により縄文時代後期に構築されたものと考えられる。

## (2) 土 坑 (第17図)

### 第1号土坑

調査区中央部b地点のQ-130グリッドに位置し、III d層面で確認した。構築面はIII d層である。規模は長軸115cm×短軸76cm、深さ44cmを測る。平面形は橢円形で、長軸方向はN-39°-Eである。底面は鍋底状で、垂直に立ち上がる。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。遺構内より遺物は出土していない。

構築時期は構築面および周辺の出土遺物から縄文時代後期と考えられる。



第17図 土坑実測図

### (3) 焼土遺構（第18図～第21図）

焼土遺構は本調査区では40基確認され、調査区南側にあたる第4トレンチ南側とb地点に多く検出された。

#### 第1号焼土遺構（第18図）

調査区北西部D-121～122グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は(169)cm×107cmを測り、焼土は(158)cm×84cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第2号焼土遺構（第18図）

調査区西北部C～D-121グリッドに位置し、III d層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は696cm×(200)cmを測り、一部には炭化材を含む。焼土は全体に点在し、最大163cm×98cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第3号焼土遺構（第18図）

調査区南部、第4トレンチの南端T-124～125グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は556cm×(200)cmを測り、焼土は南側に集中し、268cm×101cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第4号焼土遺構（第18図）

調査区南部、第4トレンチの南端T-123グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は613cm×(200)cmを測り、焼土は北側、南側に集中し、最大147cm×73cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第5号焼土遺構（第18図）

調査区南部、第4トレンチの南側R-128グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は135cm×(109)cmを測り、焼土は中央部に44cm×25cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第6号焼土遺構（第18図）

調査区中央部、第4トレンチの中央O-131グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は183cm×(131)cmを測り、焼土は中央部に35cm×37cmを測る。遺物は出土しなかった。

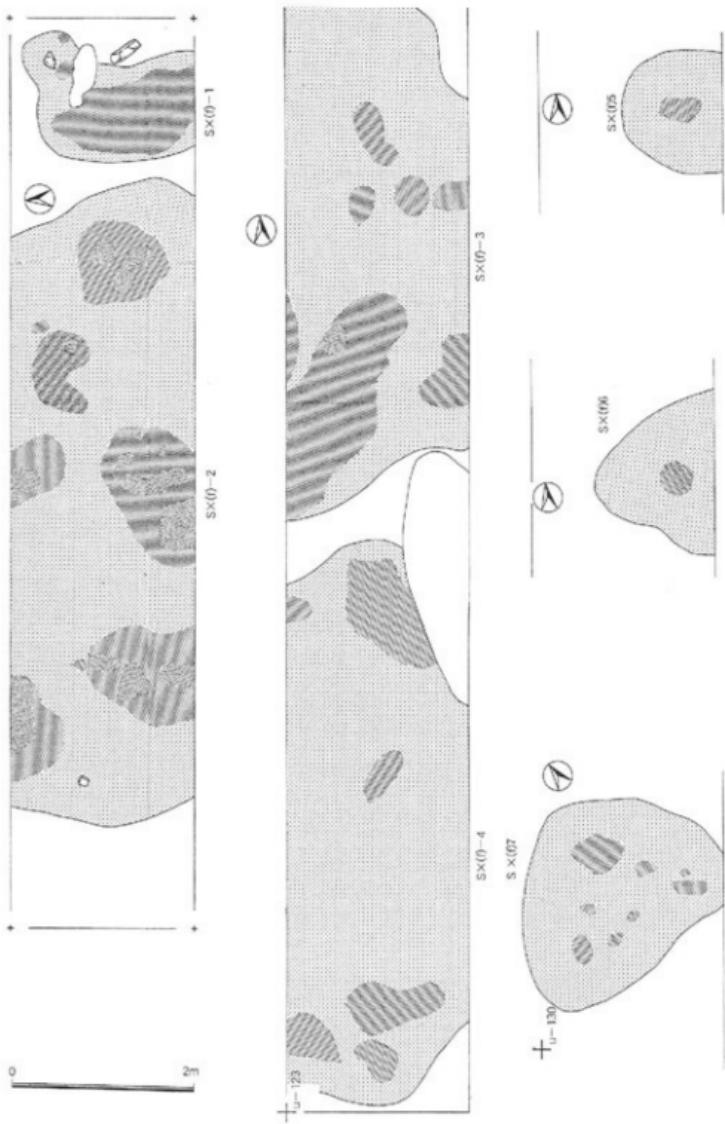
#### 第7号焼土遺構（第18図）

調査区中央部U-130グリッドに位置し、III d層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は225cm×218cmを測り、焼土は全体に点在し、最大59cm×43cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第8号焼土遺構 欠番

#### 第9号焼土遺構（第19図）

調査区中央部、第4トレンチの中央N-123グリッドに位置し、III b層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によると思われる細長い搅乱がいくつもみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は135cm×(78)cmを測り、焼土25cm×22cmを測る。遺物は出土しなかった。



第18図 焼土遺構実測図(1)

#### 第10号焼土遺構（第19図）

調査区中央部、第4トレンチの中央N-122グリッドに位置し、III b層下位で確認した。第9号焼土遺構と同様に耕作によると思われる攪乱がみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は(229)cm×129cmを測り、焼土は62cm×56cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第11号焼土遺構（第19図）

調査区中央部、第4トレンチの中央K-137グリッドに位置し、III b層で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は166cm×131cmを測り、焼土は中央部で強く、69cm×36cmを測る。本遺構より遺物は出土しなかった。

#### 第12号焼土遺構（第19図）

調査区北西部、第4トレンチの北端F-145グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は(216)cm×(106)cmを測り、焼土は13cm×11cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第13号焼土遺構（第19図）

調査区北西部、第4トレンチの北端E-146グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は138cm×(79)cmを測り、焼土は56cm×38cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第14号焼土遺構（第19図）

調査区中央部G-144グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は200cm×(133)cmを測り、焼土は11cm×12cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第15号焼土遺構（第19図）

調査区西部の第5トレンチF-122グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は(150)cm×(200)cmを測り、焼土は53cm×23cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第16号焼土遺構 欠番

#### 第17号焼土遺構（第19図）

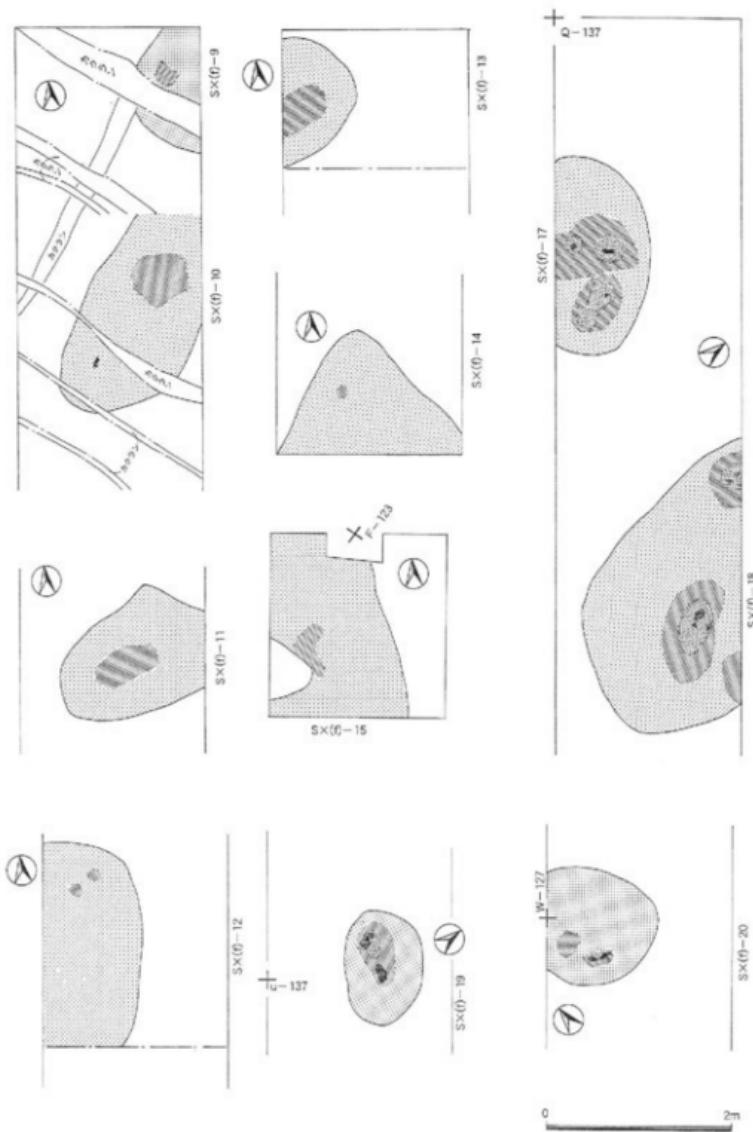
調査区中央部の第2トレンチQ-137グリッドに位置し、III b層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は113cm×(101)cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は(89)cm×61cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第18号焼土遺構（第19図）

調査区中央部の第2トレンチR-137グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は338cm×205cmを測り、焼土は全体に点在し、規模は最大117cm×53cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第19号焼土遺構（第19図）

調査区中央部の第2トレンチU-137グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は122cm×84cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は69cm×37cmを測る。遺物は出土しなかった。



第19図 焼土遺構実測図(2)

#### 第20号焼土遺構（第19図）

調査区南部W-126～127グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は125cm×140（推定値）cmを測り、焼土は31cm×13cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第21号焼土遺構（第20図）

調査区中央部b地点のQ-131～132グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は113cm×83cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は59cm×41cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第22号焼土遺構（第20図）

調査区中央部b地点のQ-131グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は68cm×67cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は32cm×34cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第23号焼土遺構（第20図）

調査区中央部b地点のU-132グリッドに位置し、III b 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は232cm×（88）cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は108cm×（79）cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第24号焼土遺構（第20図）

調査区中央部b地点のT-131グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は97cm×71cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は44cm×33cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第25号焼土遺構（第20図）

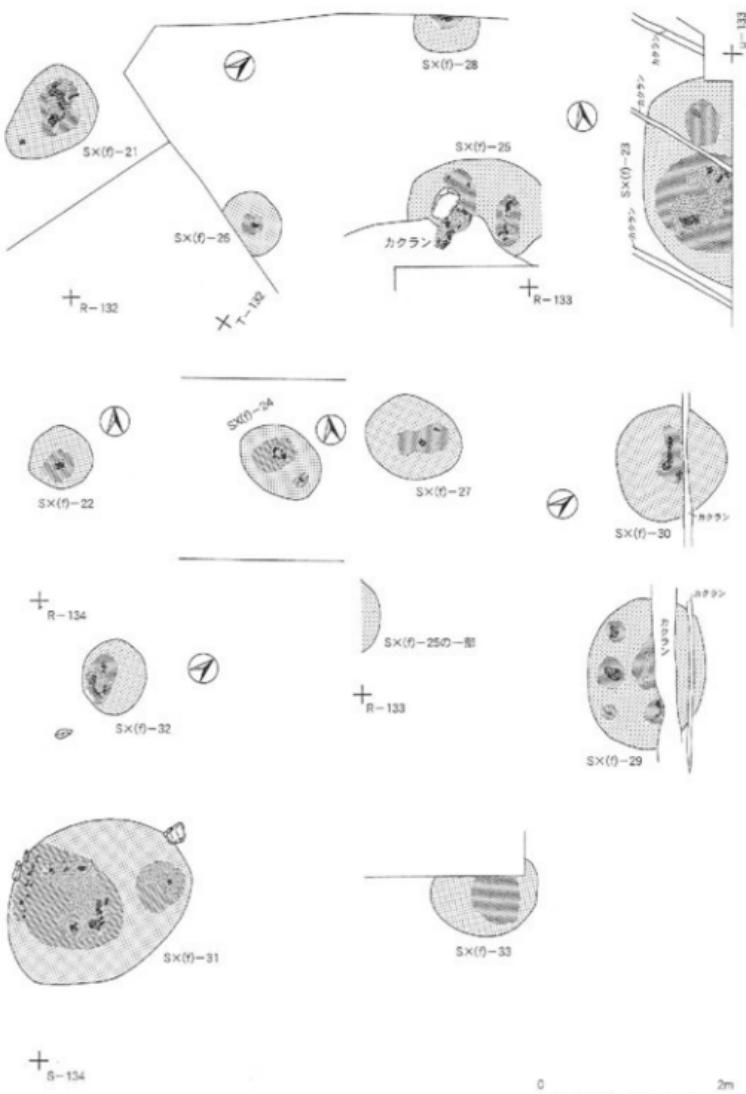
調査区b地点のQ-132グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は144（推定値）cm×111cmを測り、焼土の色は中央で強く、91cm×31cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第26号焼土遺構（第20図）

調査区中央部b地点のQ-132グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は69cm×（49）cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は23cm×24cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第27号焼土遺構（第20図）

調査区中央部b地点のQ-133グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は106cm×90cmを測り、焼土の色は中央で強く、その規模は55cm×29cmを測る。遺物は出土しなかった。



第20図 烧土遺構実測図(3)

#### 第28号焼土遺構（第20図）

調査区中央部 b 地点の Q-132 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は 68cm × (41) cm を測り、焼土の色は中央で強く、その規模は 34cm × (13) cm を測る。遺物は出土しなかった。

#### 第29号焼土遺構（第20図）

調査区中央部 b 地点の Q～R-133 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によると思われる細長い溝があり、遺構の一部が搅乱されている。焼土および焼土粒を含む範囲は 165cm × 124cm を測り、焼土は全体に点在しており、最大 62cm × 25cm を測る。遺物は出土しなかった。

#### 第30号焼土遺構（第20図）

調査区中央部 b 地点の Q-133 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は 128cm × 115cm を測り、焼土は 62cm × 29cm を測る。遺物は出土しなかった。

#### 第31号焼土遺構（第20図）

調査区中央部 b 地点の R-133～134 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は 216cm × 171cm を測り、焼土は 126cm × 103cm を測る。遺物は出土しなかった。

#### 第32号焼土遺構（第20図）

調査区中央部 b 地点の R-134 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は 83cm × 69cm を測り、焼土の色は南西側で強く、その規模は 57cm × 31cm を測る。遺物は出土しなかった。

#### 第33号焼土遺構（第20図）

調査区中央部 b 地点の R-133 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は 116cm × 92（推定値）cm を測り、焼土の色は中央で強く、その規模は 54cm × 51cm を測る。遺物は出土しなかった。

#### 第34号焼土遺構（第21図）

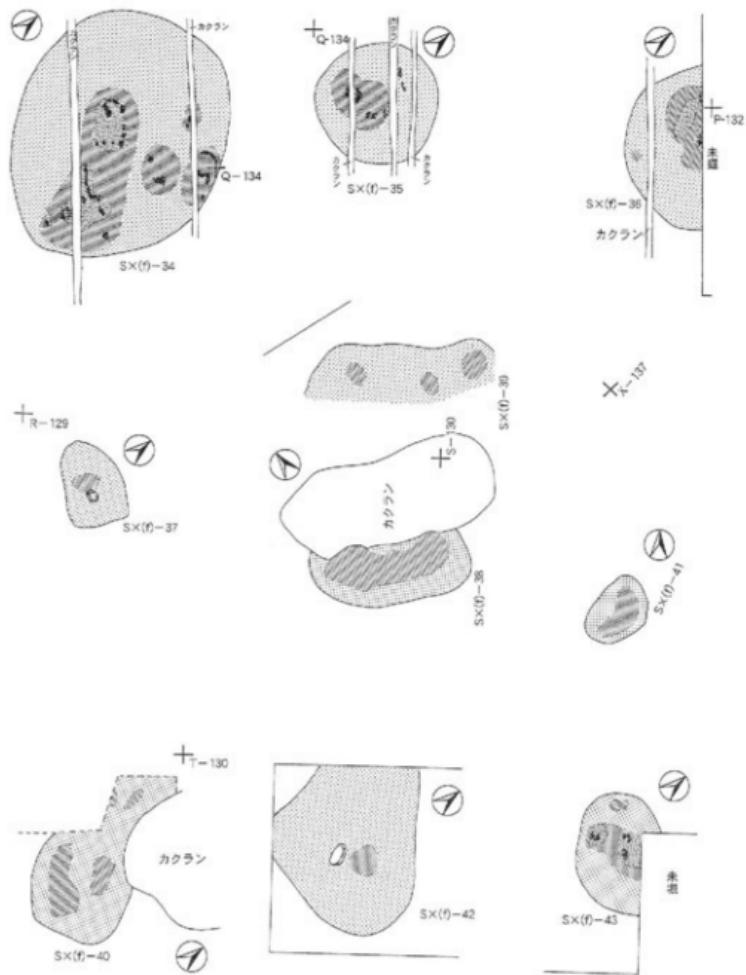
調査区中央部 b 地点の P～Q-134 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によると思われる搅乱がみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は 276cm × 222cm を測り、焼土の色は中央で強く、その規模は 178cm × 65cm を測る。遺物は出土しなかった。

#### 第35号焼土遺構（第21図）

調査区中央部 b 地点の Q-134 グリッドに位置し、III d 層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によると思われる搅乱がみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は 111cm × 109cm を測り、焼土の色は中央で強く、その規模は 58cm × 51cm を測る。遺物は出土しなかった。

#### 第36号焼土遺構（第21図）

調査区中央部 b 地点の P-131～132 グリッドに位置し、III b 層面で確認した。北西から南東にかけて耕作によるものか細長い搅乱がみられる。焼土および焼土粒を含む範囲は 172cm × 83



第21図 焼土遺構実測図(4)

0 2m

(推定値) cmを測り、焼土は89cm×38 (推定値) cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第37号焼土遺構 (第21図)

調査区中央部R-129グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は95cm×62cmを測り、焼土は31cm×19cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第38号焼土遺構 (第21図)

調査区中央部R-129グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は170cm×66 (推定値) cmを測り、焼土は131cm×32cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第39号焼土遺構 (第21図)

調査区中央部b地点のR～S-130グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は201cm×62 (推定値) cmを測り、焼土は全体に点在しており、最大31cm×26 cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第40号焼土遺構 (第21図)

調査区中央部T-129グリッドに位置し、III b層下位で確認した。一部が風倒木痕により搅乱されている。焼土および焼土粒を含む範囲は202 (推定値) cm×108cmを測り、焼土は全体に点在しており、最大75cm×32cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第41号焼土遺構 (第21図)

調査区南東部X-136グリッドに位置し、III b層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は77cm×54cmを測り、焼土は55cm×26cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第43号焼土遺構 (第21図)

調査区南部S-141グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は128cm×88cmを測り、焼土は中央部で強く、59cm×52cmを測る。遺物は出土しなかった。

### (4) 遺構外出土遺物

遺構外より出土した遺物は、縄文土器破片307点、石器6点である。

#### ① 土 器 (第22図～第26図)

本調査区からは307点の縄文土器破片が出土した。北東部や中央部が多い (第27図)。

#### 後期初頭から前葉の土器 (第22図～第24図)

##### 1類：帶縄文が施文された土器 (1～26)

帶縄文が施文された土器を一括した。小破片が多く器形が明確でないものが多いが、深鉢形土器と思われるものが多くみられ、口縁部分が外反しているものもある。帶縄文の幅は狭く、曲線文や入り組み文がみられるものもある。焼成はいずれも良好で、色調はにぶい黄橙色、黄褐色を呈する。

## 2類：地文上に沈線文が施された土器（27～29、32）

地文上に沈線文が施された土器を一括した。小破片のみのため、全体の文様構成や器形は不明である。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色、にぶい赤褐色を呈する。

## 3類：沈線文が施された土器（33～69）

沈線文のみで文様構成されている土器を一括した。調査区中央部からの出土が目立つ。深鉢形土器が多くみられる。69は波状口縁をもち、口縁部が外反する。円形文、曲線文などが施されており、55には渦巻文が、36には花卉状文が施されている。焼成はおおむね良好で、色調はにぶい黄橙色、にぶい赤褐色、暗赤褐色を呈する。

## 後期初頭から中葉の土器（第24図～第26図）

### 1類：撚糸文の土器（70～76）

撚糸文が施された土器を一括した。破片が小さく、器形は不明であるが、72と75は平口縁とわかる。70～76はすべて網目状撚糸文が施された土器である。胎土に砂粒を含むものがみられ、焼成はおおむね良好である。色調は、にぶい黄橙色を呈する。

### 2類：条痕文の土器（106）

条痕文が施された土器である。本調査区からは1点のみ出土した。

### 3類：繩文の土器（77～80、98～108、110～123）

本類には無節、単節、複節の繩文が施文されたものを一括した。107は無節の繩文が施文されたもので、77～80は複節の繩文が施文されたものである。破片が小さいものが多いが、主体は深鉢形の土器であると思われる。110については繩文が細かく薄いため、時代が下る可能性がある。焼成は良好で、色調は、にぶい黄橙色、にぶい橙色を呈する。

## ② 石 器（第28図）

本調査区における石器の出土はきわめて少ないが、調査区全体から出土している。（第29図）

### 石 鐵

本調査区から4点出土した。石材はすべて硬質頁岩である。

1群…有茎石鐵で、基部形態から以下のように細別した。

a…平基有茎石鐵で、本調査区からは1点出土した。(2)

b…凹基有茎石鐵で、本調査区からは1点出土した。(3)

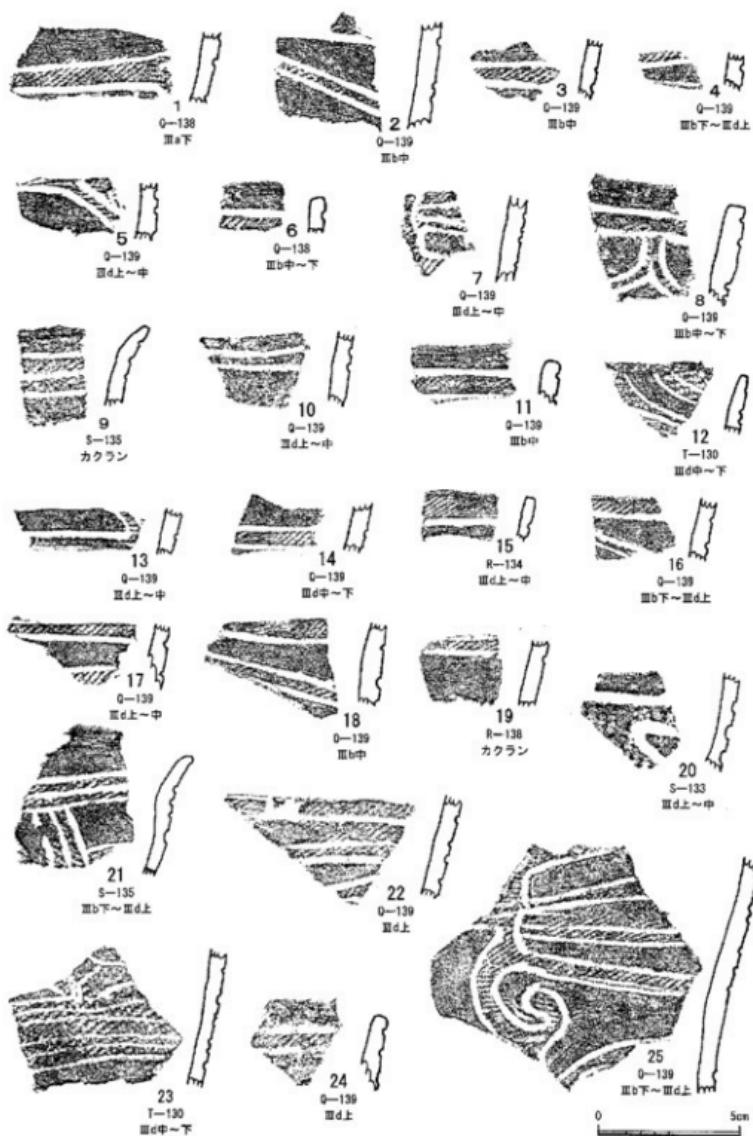
c…凸基有茎石鐵で、本調査区からは出土しなかった。

2群…無茎石鐵で、基部形態から以下のように細別した。

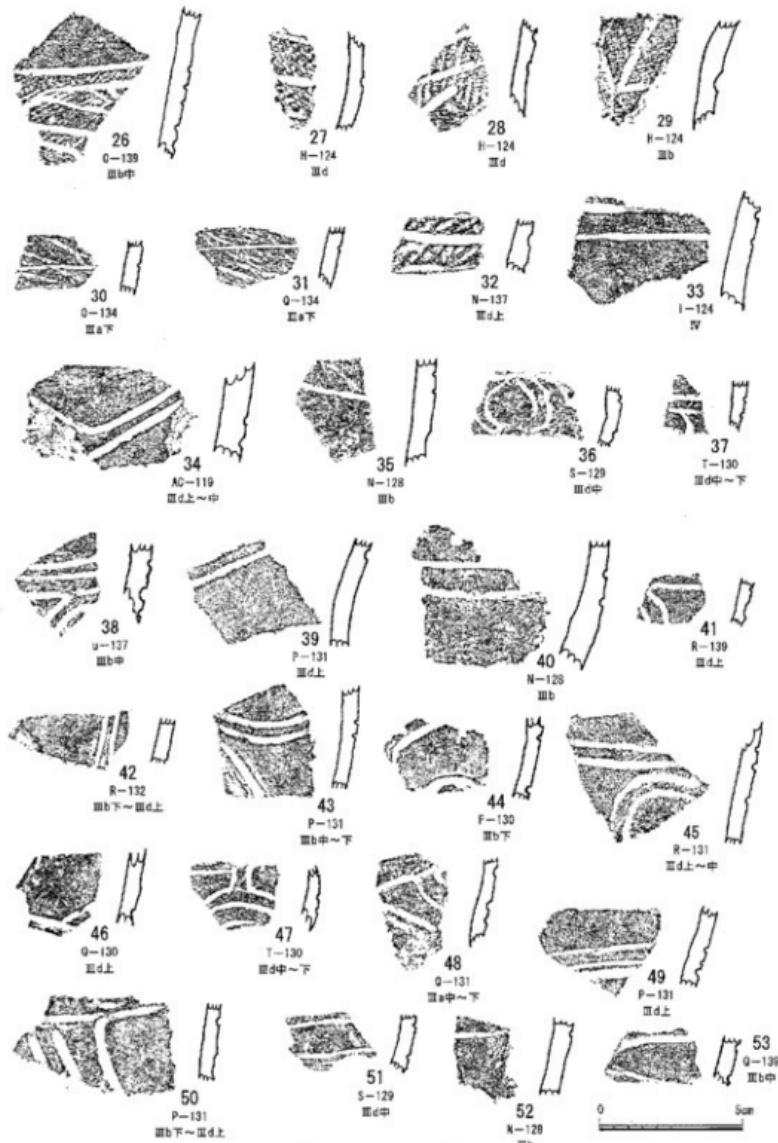
a…平基無茎石鐵で、本調査区からは1点出土した。(1)

b…凹基無茎石鐵で、本調査区からは1点出土した。(4)

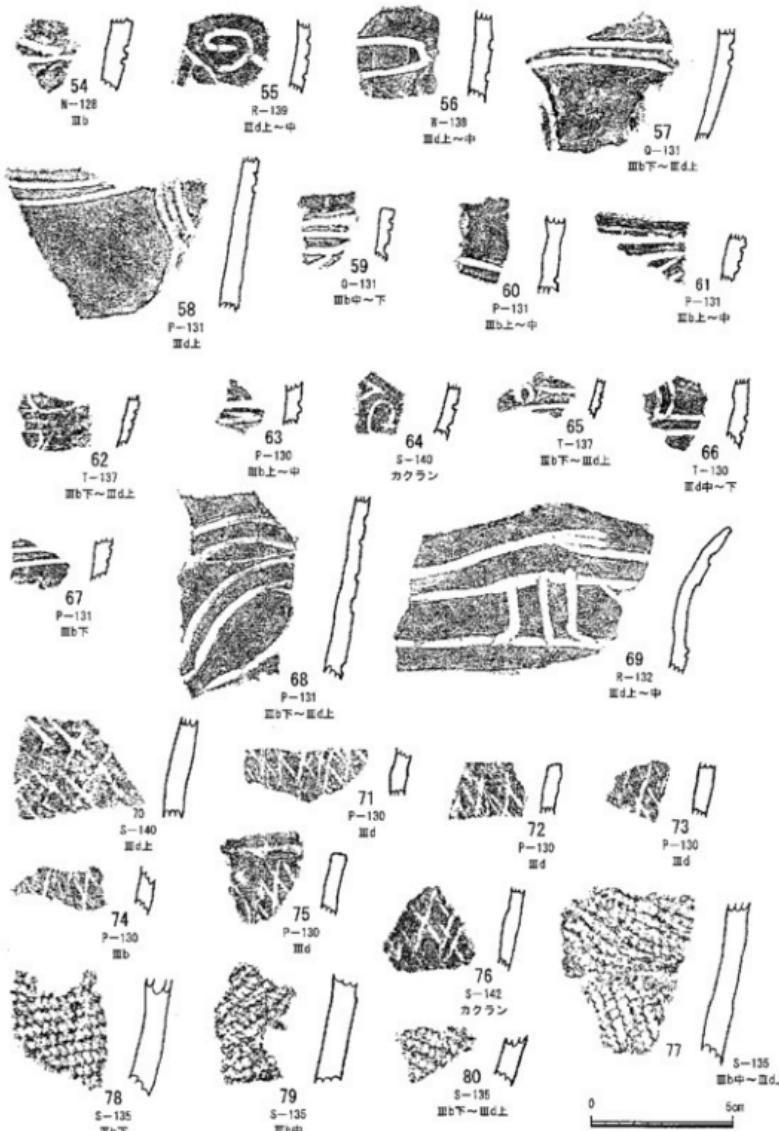
c…尖基石鐵で、本調査区からは出土しなかった。



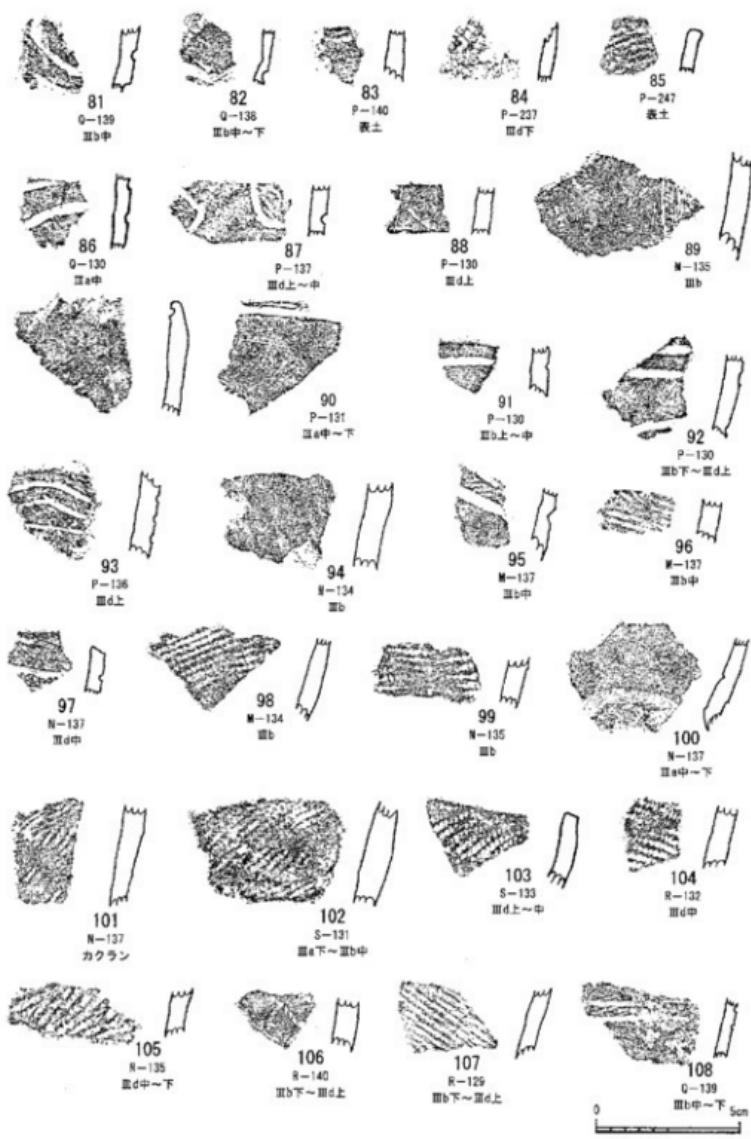
第22図 出土土器(1)



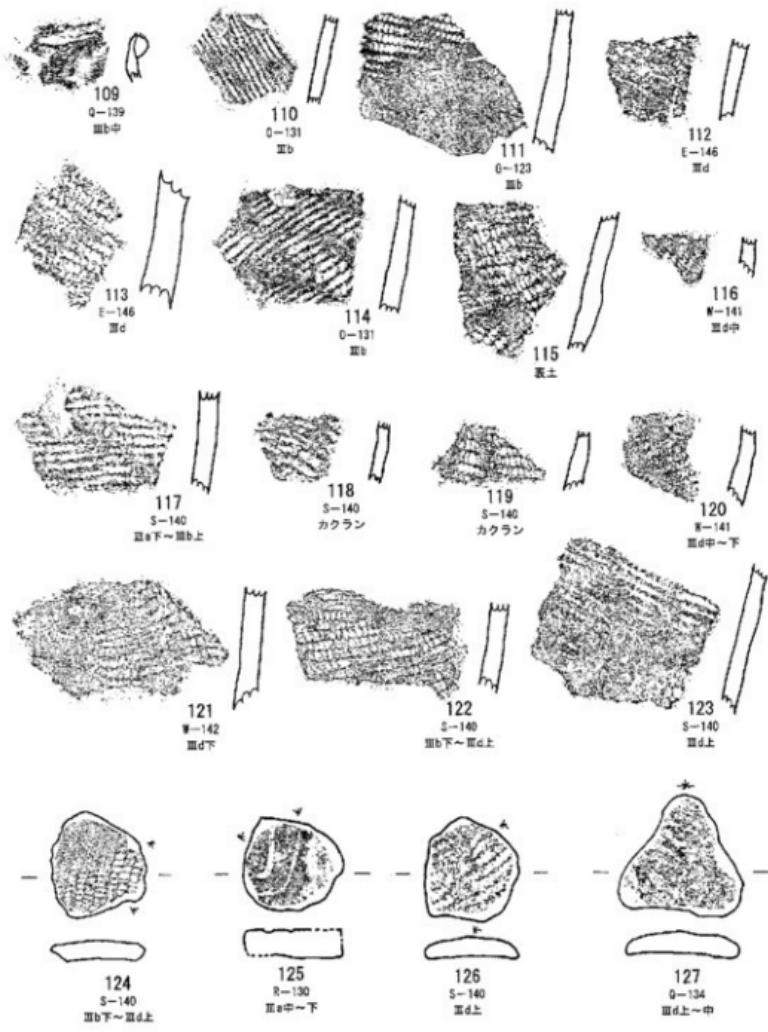
第23図 出土土器(2)



第24図 出土土器(3)

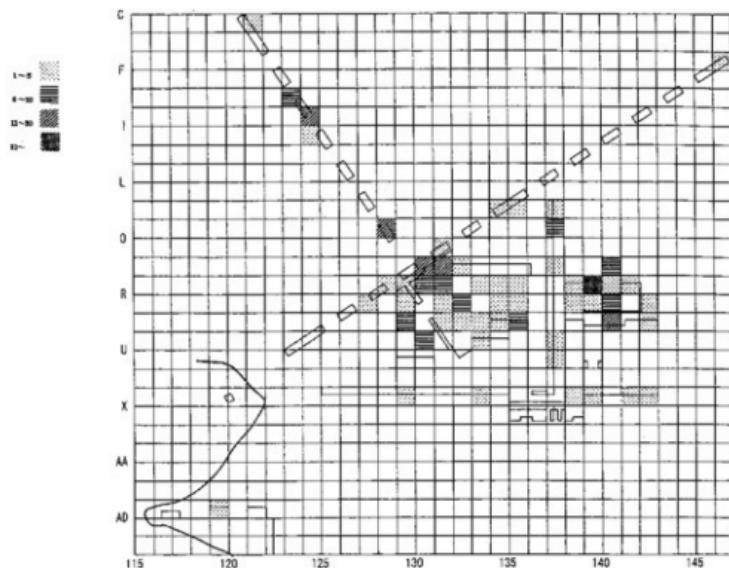


第25図 出土土器(4)

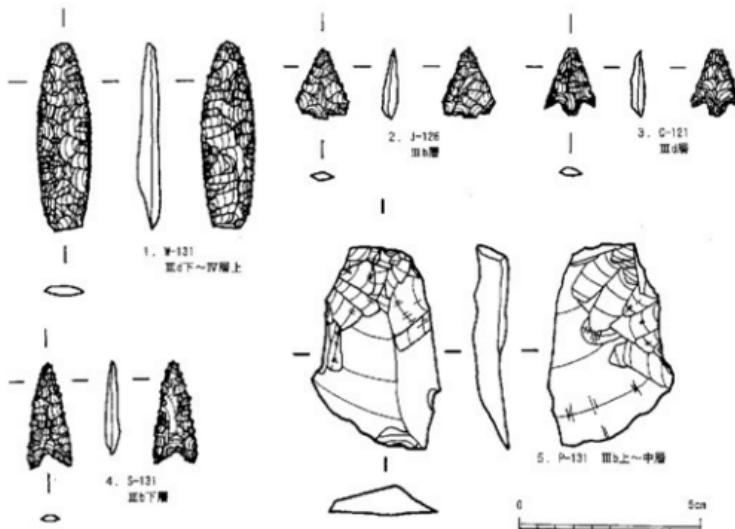


0 5cm

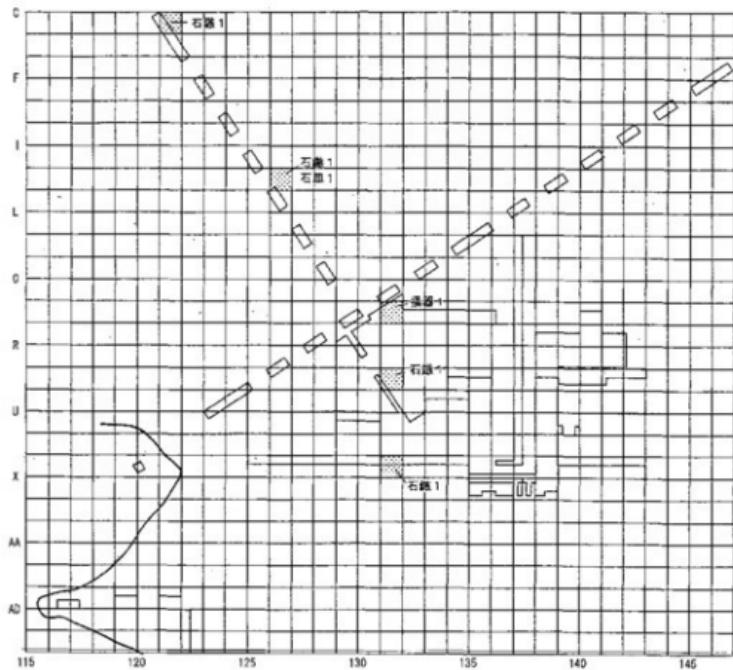
第26図 出土土器(5)・土製品



第27図 出土土器破片分布状況



第28図 出土石器



第29図 出土石器分布状況

### 搔 器

本調査区からは1点出土した。5は打面付近にのみ剥離がみられるが、刃部は先端部一側様である。石材は、硬質頁岩である。

### 石 盆

本調査区からは1点出土した。欠損品で、石材は砂質凝灰岩である。

### ③ 土製品（第26図）

本調査区からは4点の土製品が出土し、すべてが土器破片利用土製品である。

#### 土器破片利用土製品

土器破片を打ち欠き、研磨することによって整形しているものである。形態的に円形、三角形、方形に分類される。本調査区から出土したものは、124～126は円形、127は三角形である。

## 2. 歴史時代

本調査区で検出された歴史時代の遺構は道路状遺構1条である。

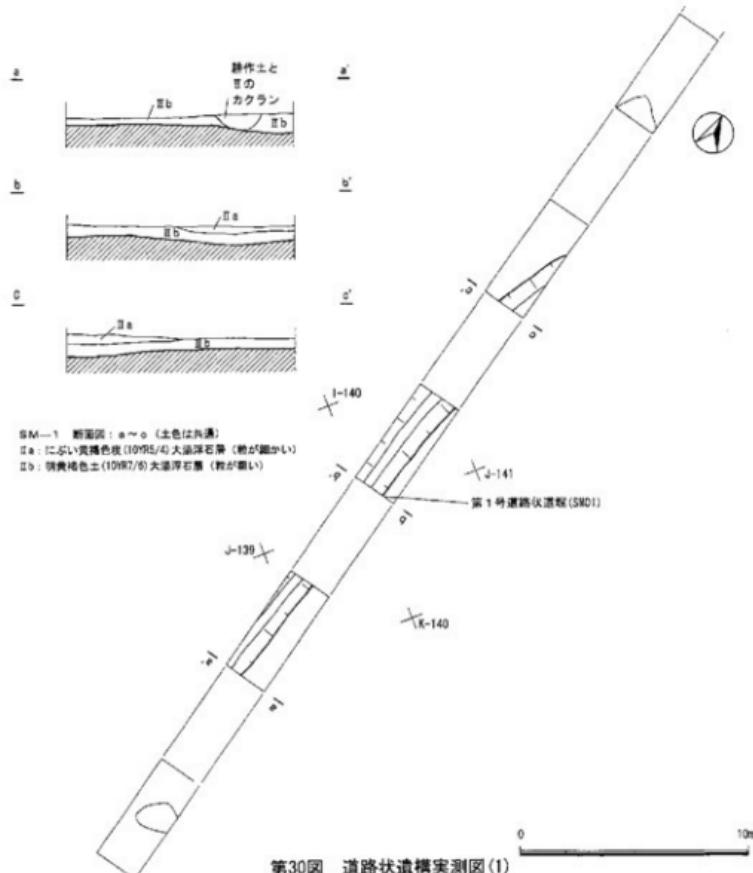
### (1) 道路状遺構（第30図）

本調査区からは1条の道路状遺構が検出された。

### 第1号道路状遺構

調査区北西部 J-138~139、I-140、H-141グリッドに位置し、II層である十和田a降下火山灰除去と同時に確認された。南西から北東へと続いており、2mの幅で硬くしまっているのが確認された。硬くしまる部分の高さは周辺より低くなってしまっており、その上に十和田a降下火山灰が周囲より厚く堆積していた。このことから、この道路状遺構が火山灰降下時には周囲より低くなるほど硬くしまった状態におかれていいたことが判明した。

構築時期は、火山灰の堆積状況および層位により大湯浮石降下前の平安時代前半以前と考えられる。  
(三浦貴子)



第30図 道路状遺構実測図(1)

## 第IV章 A5区検出遺構と出土遺物

### 1. 縄文時代

本調査区で検出された縄文時代の遺構は、焼土遺構1基である。

#### (1) 焼土遺構

##### 第42号焼土遺構（第21図）

調査区南西部A-C-116グリッドに位置し、III d層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は178（推定値）cm×152cmを測り、焼土は32cm×28cmを測る。焼土のまわりに石が立てられた状態で検出しており、石窯炉の可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

#### (2) 遺構外出土遺物

本調査区から出土した遺物は縄文土器1点である。（第23図34）

（三浦貴子）

## 第V章 分析と考察

### 1. 配石遺構群について

#### (1) 配石遺構の形態

一本木後口地区は、昭和59年から61年まで発掘調査し、3カ年に確認された配石遺構43基について、大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)で分析と考察を行っている。今回の発掘区は、この調査区A<sub>1</sub>～A<sub>3</sub>区の南西側隣接地であり、一本木後口配石遺構群が広がると予想された部分である。このため、以下の分析においては、分類基準等は基本的に報告書(3)と同一とする。

なお、本年度の調査によって、12基の配石遺構が確認され、昭和50年に確認されている1基の配石遺構の再確認を行っているが、これらの配石遺構は後述のように2つの群に分割される。一つは以前から確認されている一本木後口配石遺構群の続きと考えられる一群、もう一つはその南西28～53mに位置する一群である。いずれもその小字名が一本木後口であるため、従来の一本木後口配石遺構群と呼んでいたものを以後一本木後口配石遺構群A、新たに確認された配石遺構群を一本木後口配石遺構群Bと仮称する。

#### (2) 配石遺構の形態

配石遺構の形態については、報告書(3)において次のように分類している。

I類…縁辺部に立石を巡らすもので、内・外部構造から4類に細分される。

- a. 縁辺部形態が楕円形を呈し、その内部に平石を数個置いたもの。
- b. 形態が楕円形を呈し、その内部中央に立石を立て、その隙間に平石を置くもの。
- c. 形態が円形を呈し、その内部に数個～十数個の平石を積み、さらにその縁辺部外側に石を環状に巡らすもの。
- d. 下部土坑の四方向に立石を立て、その内部に平石を数個置き、さらにその縁辺部に内部を覆うように斜めに立石を巡らすもの。

II類…立石のみで配石がつくられるもので、3類に細分される。

- a. 縁辺部に立石を楕円形に巡らすもの。
- b. 配石下土坑の長軸両端に一对の立石を立てるもの。
- c. 配石下土坑の長軸両端に一对の立石を立て、そのほぼ中間に数個の小さな石を立てるもの。

III類…配石縁辺部に平石を巡らせるもので、次の2類に細分される。

- a. 石の長軸を連結させ、円形に一巡させるもので、その内部に石が雜然と積まれるもの。
- b. 石の長軸を中心に向かって、所謂放射状に置き、その内部には石が雜然と積まれるもの。

今年度、確認された配石遺構の配石形態は第3表に示すとおりである。第2、18号配石遺構は後世の擾乱により石が本来の位置を動いたり抜かれているため、形態はつかめない。形態の推測できる配石は11基で、うち7基がI a類で、第17号配石遺構もI a類の可能性もある。I b類は第10号配石遺構、I c類は第16号配石遺構のそれぞれ1基のみで、第11号配石遺構はII a類である可能性がある。なお、III類に分類される配石は今年度の発掘では確認されていない。比較のため、第2表に昭和59～61年に確認された配石遺構の観察表を再掲した。

#### (3) 配石下土坑について

配石遺構の保存のため、配石下の発掘は第1号配石遺構1基しか行っていない。しかも配石を動かさないという調査方針から部分的な調査となつたため、下部土坑の存在と長軸径、深さの確認に終わっている。同配石下の土坑の規模は、長軸径が153cm、深さが65cmで、以前調査された一本木後口配石遺構群Aの配石下土坑の規模と比較すると、長軸がやや長いものの、規模的な矛盾はない。

他の配石下の発掘は行っていないが、第17号配石遺構のように配石遺構構築面で下部土坑と考えられるプランがみえる遺構もあることや、以前調査された一本木後口配石遺構群域の配石には全て下部土坑が伴うことから、今年度確認された配石遺構下にも土坑があるものと考えられる。

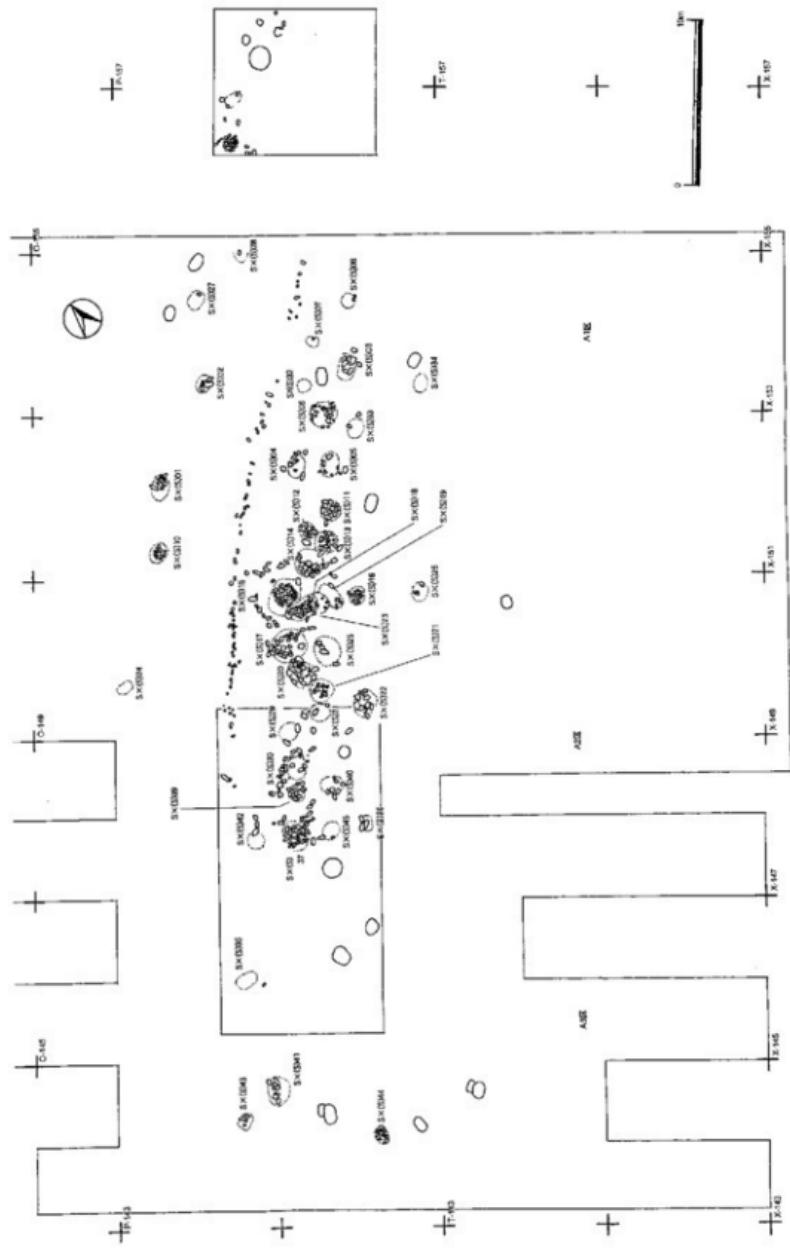
#### (4) 配石遺構の時期・性格

配石遺構に伴う遺物は、下部土坑の調査が第1号配石遺構1基のみであることもあり、確認されていない。このため、配石遺構の構築時期を明確にすることはできない。ただし、配石遺構の構築面がこれまでに確認されている配石遺構と同じIII d層上面であることや配石周辺の同層の出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

#### (5) 配石遺構の配置

一本木後口地区の第1次から3次の調査で確認された所謂一本木後口配石遺構群は配石遺構43基、弧状列石1条、土坑数基から構成されている。第1、2次調査部分（配石群北東部）においては、配石遺構は幅20mの弧状带上に位置し、この帶は弧状列石により内・外帯に二分割され、内帯側の配石遺構は4～6基を1単位とする小塊（A～F小塊）に細分され、それぞれ最も近い距離の外帯に位置する配石遺構1基に対応するという規則的な配置であった。これに対し、第3次調査部分（配石群南西部）では、弧状列石や外帯の配石遺構は検出されず、配石遺構10基と同性格と考えられる土坑3基はいずれも幅10mの内帯の延長線上に位置している。これらの遺構も小塊（Z A～Z D小塊）に細分されるが、その1単位の数が3～5基と少なく、各小塊間の距離も広くなっている。

また、A～F小塊ではI a類（縁辺部に立石を一巡し、その内部に平石をおくタイプ）の配



第31圖 一本木後口配石遺構群

石遺構が外帶を構成し、内帶の各小塊に内在するⅢa類（縁辺部に平石を長軸が連結するよう円形に一巡させ、その内側に石を雑然と積むタイプ）と相関関係にあったが、ZA～ZD小塊ではⅠa類の配石遺構は内帶の小塊に内在するという違いがみられる。

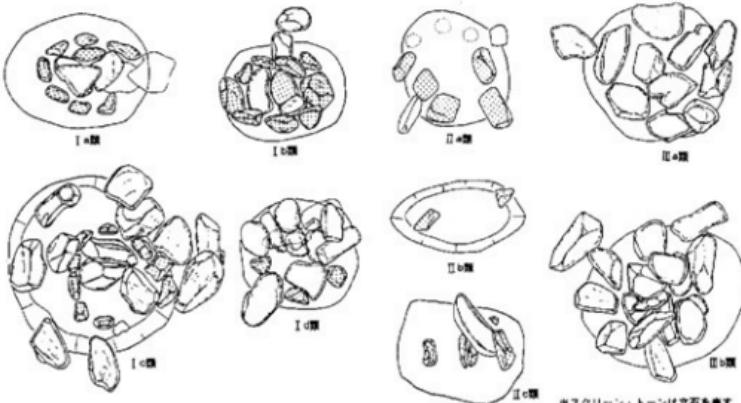
これらの配石遺構群はさらに南西及び東方向へと延びる様相をしているが、野中堂、万座渓状列石のように円形（環状）に一巡することはないと考えた。それは、発掘部分の配石群の曲率から、円と仮定してその直径をだすと300mとなり、その南東部が台地からはみ出るからである。このため、これらの配石遺構群は、曲率を変え、南西～北東方向に長い椭円形状に一巡するか、一巡せず弧状で終わるかのいずれかとした。

今年度の調査目的の一つは、これらの推察が正しいどうかを確認することにあった。すなわち、一本木後口配石遺構群が南西方向にどのような曲率でどこまで延びるのか、それらの配石群の形態、分布状況はどうかを判断する資料を得ることであった。

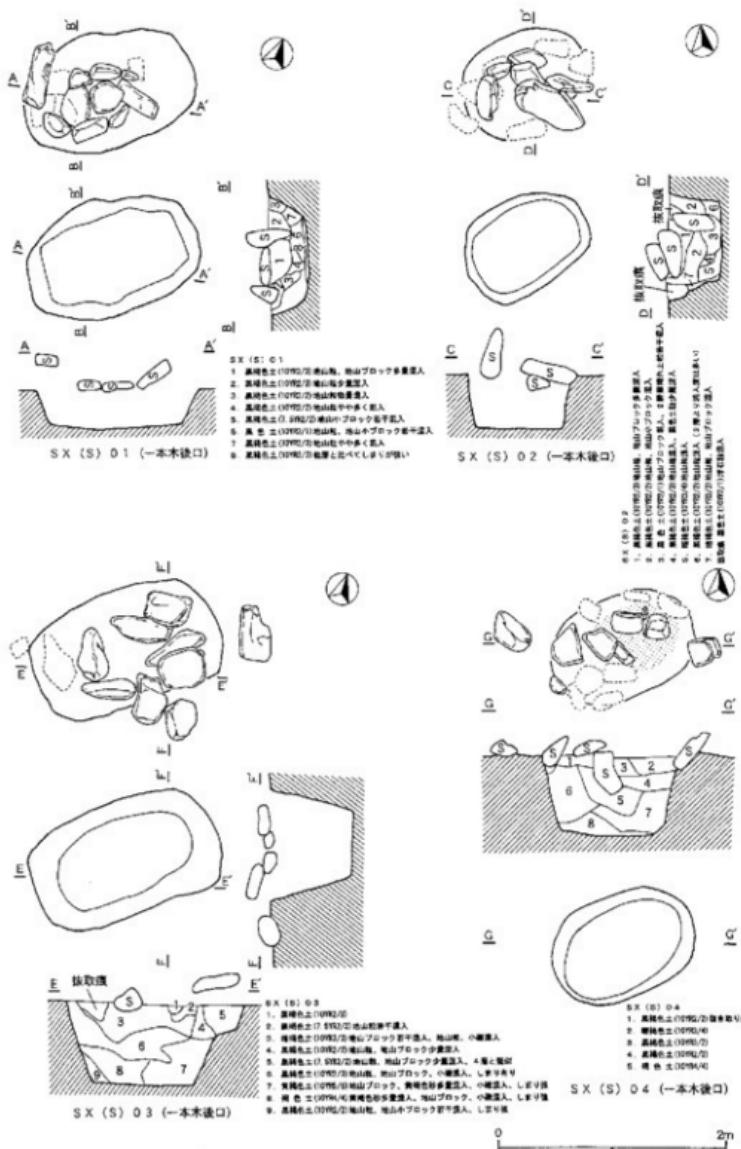
前述のよう、に、今年度の調査で、新たにa地点で4基、b地点で8基の配石遺構が検出され、c地点で昭和50年に発見されていた1基の配石遺構を再確認した。

なお、a地点の配石とb地点の配石が一連のものか問題となり、a地点南西側とb地点北東側をIV層上面まで精査したが、配石遺構や土坑が確認されず、別の群であると判断した。両部分の一部は耕作によりIV層上位にまで擾乱が及んでおり、配石は抜き取られた可能性もないではないが、これまでに確認されている一本木後口地区の配石下土坑の深さは19～70cmもあり、擾乱により下部土坑まで消失とは考えられないからである。

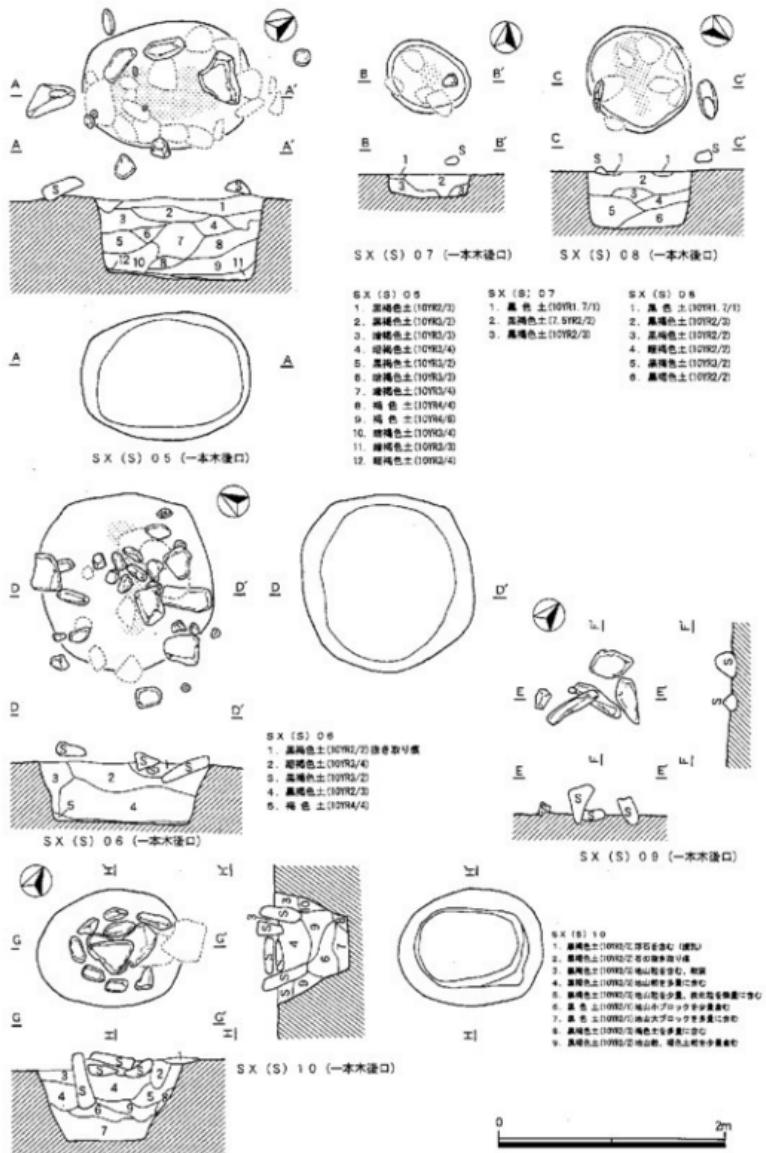
a地点と第3次調査地A<sub>3</sub>区との間には若干の未掘部分があるが、新たに確認された配石遺構4基の分布位置がA<sub>3</sub>区の配石群の曲率とほぼ同じであるため、これらの配石遺構はこれま



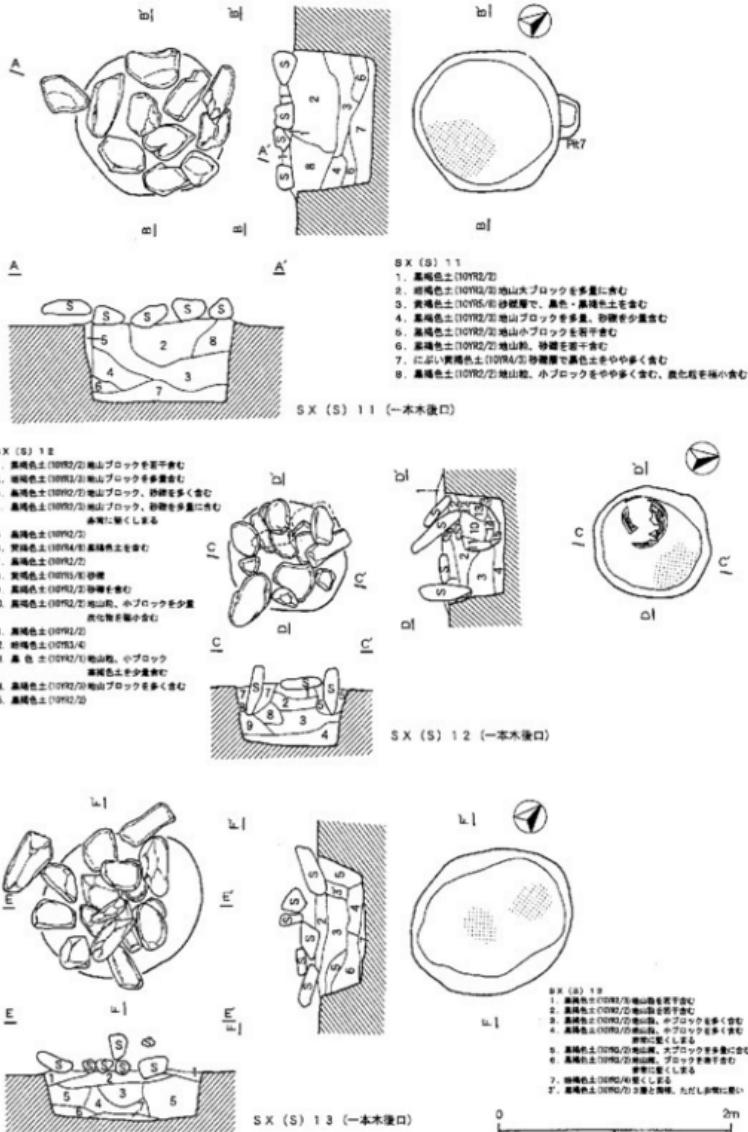
第32図 配石遺構形態分類図



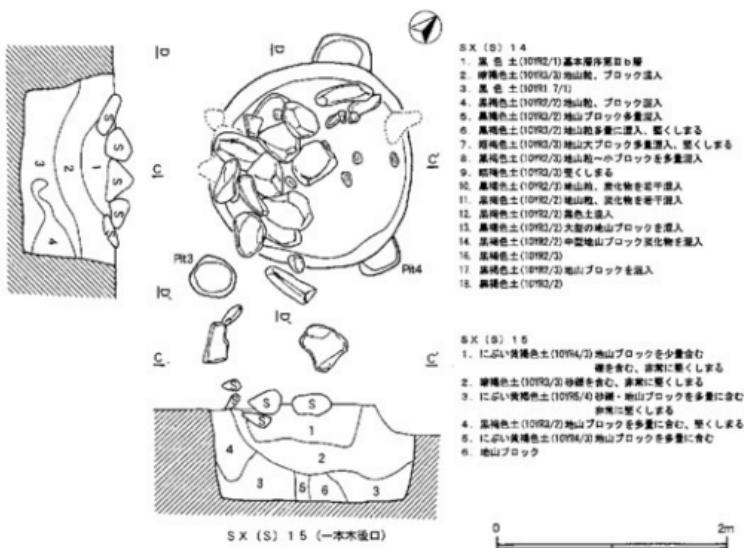
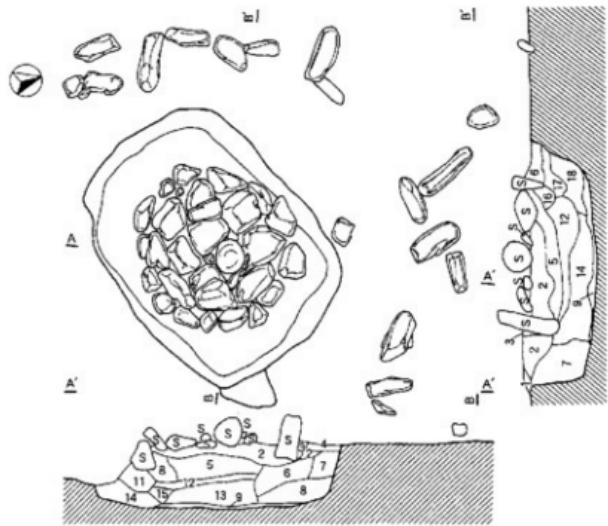
第33図 一本木後口配石遺構実測図(1)



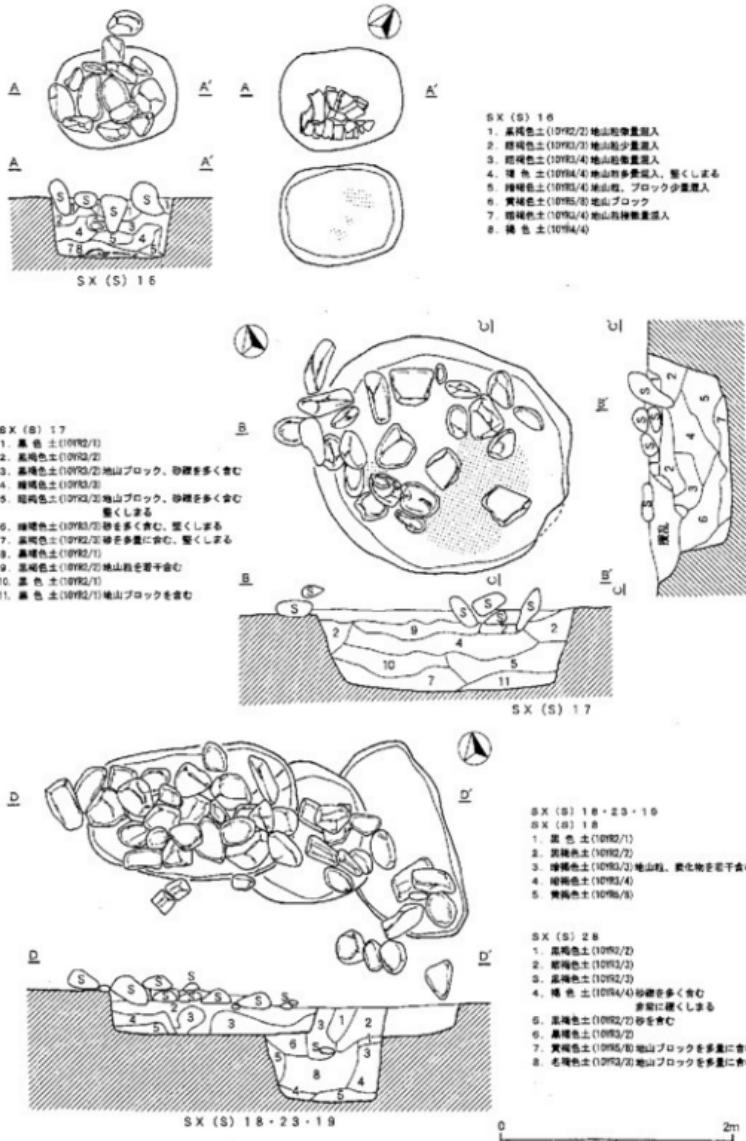
第34図 一本木後口配石遺構実測図(2)



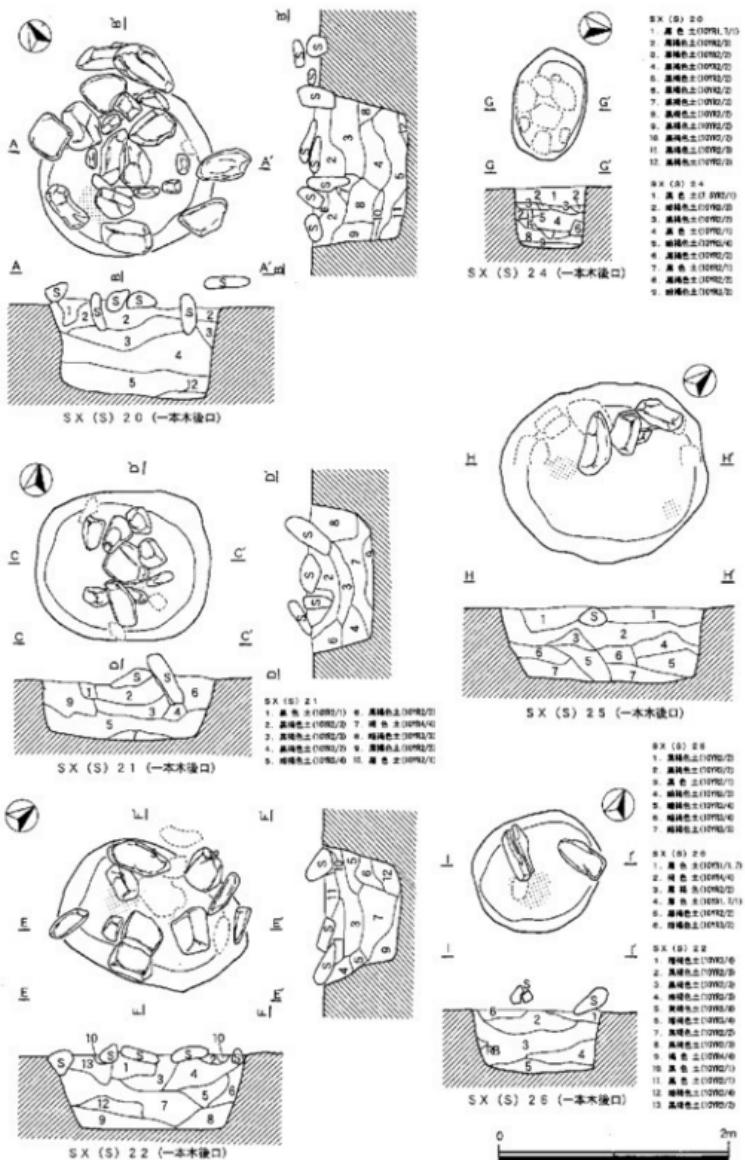
第35図 一本木後口配石造構実測図(3)



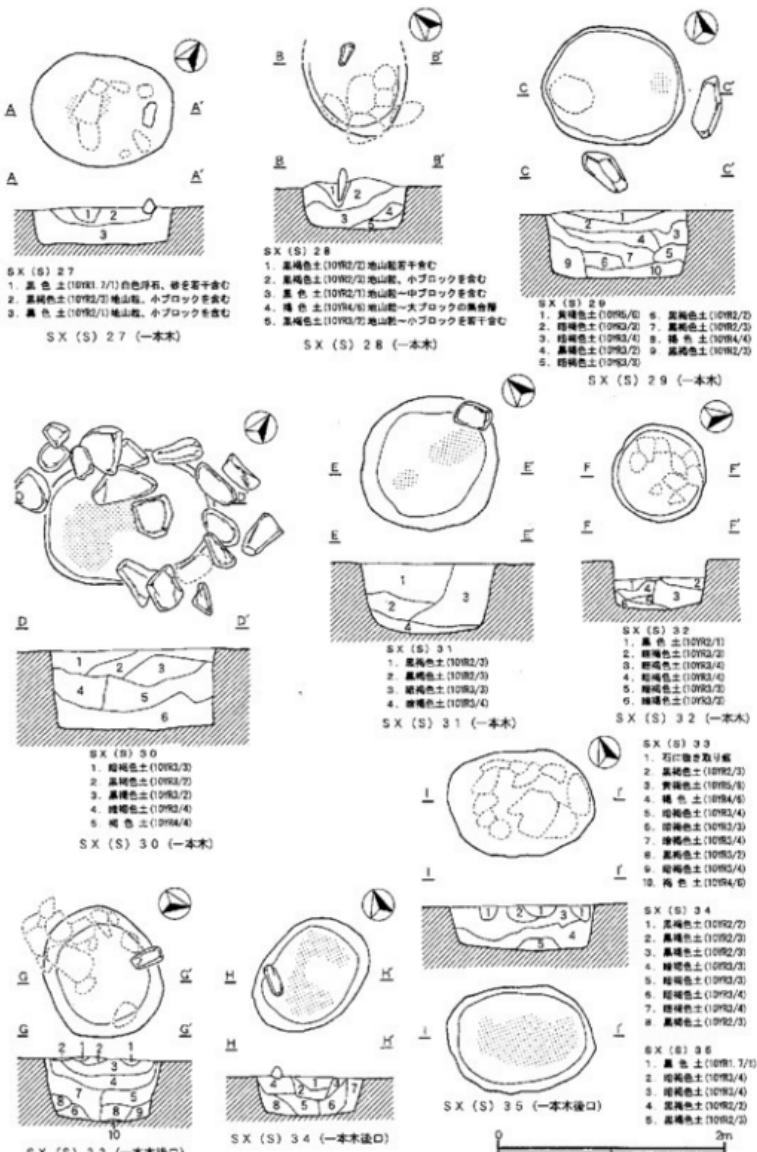
第36図 一本木後口配石造構実測図(4)



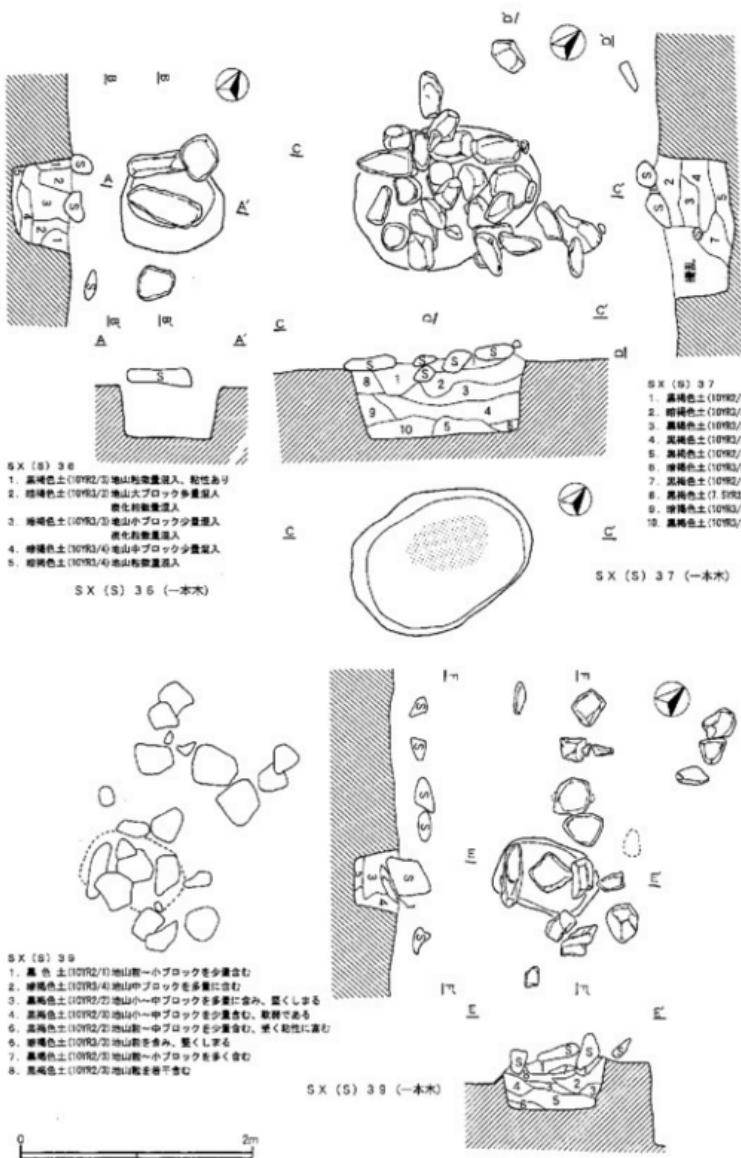
第37図 一本木後口配石遺構実測図(5)



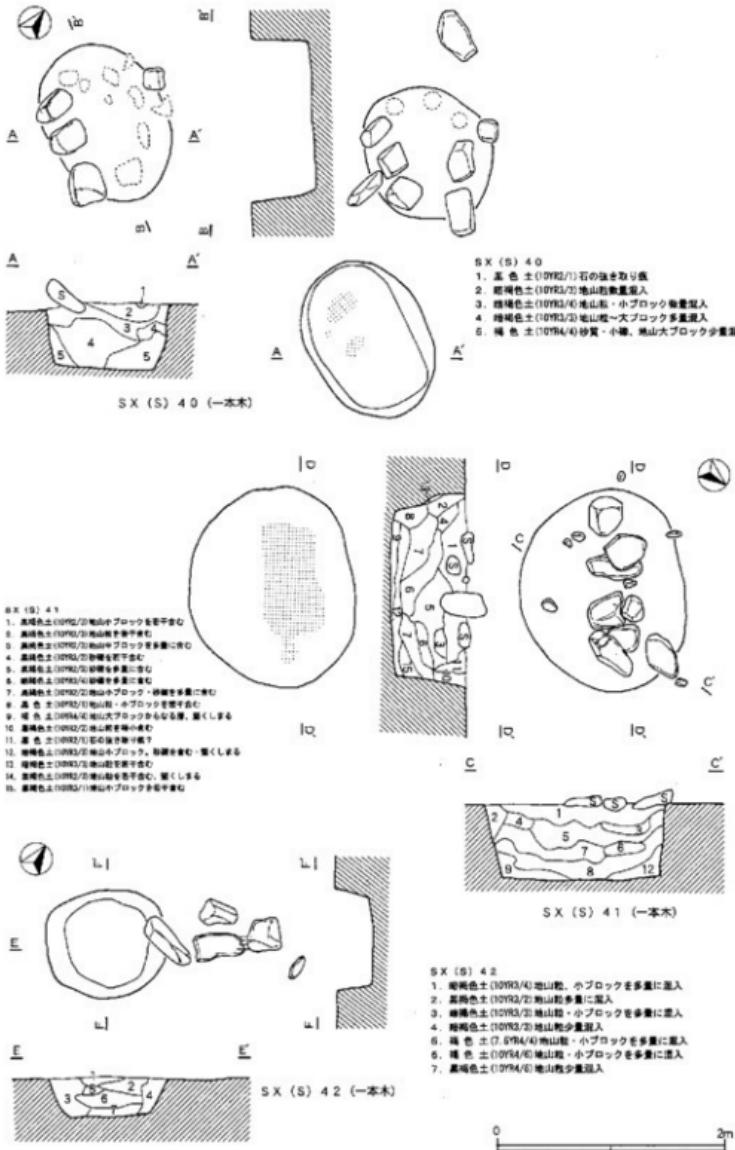
第38図 一本木後口配石遺構実測図(6)



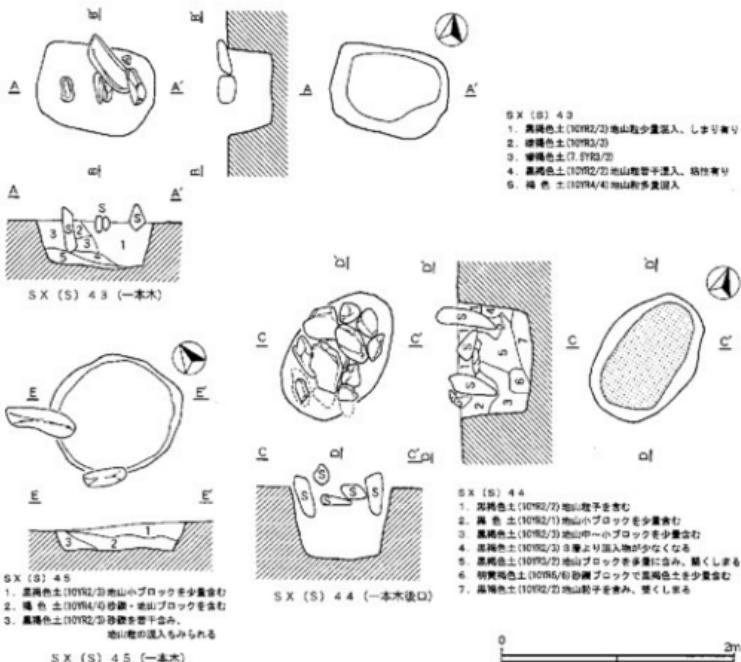
第39図 一本木後口配石造構実測図(7)



第40図 一本木後口配石造構実測図(8)



第41図 一本木後口配石遺構実測図(9)



第42図 一本木後口配石遺構実測図(10)

で一本木後口配石遺構群と呼ばれていたものと一連のものと考えられる。以下、この配石遺構群を一本木後口配石遺構群A、b地点で確認された配石遺構群を一本木後口配石遺構群Bとして分析を試みる。

#### 一本木後口配石遺構群A

先にのべたとおり、一本木後口配石遺構群Aはa地点の南西部に延びることはない。c地点で確認されている配石遺構につながるかは、a地点、c地点間の調査が不十分で、現時点では結論を出せない。

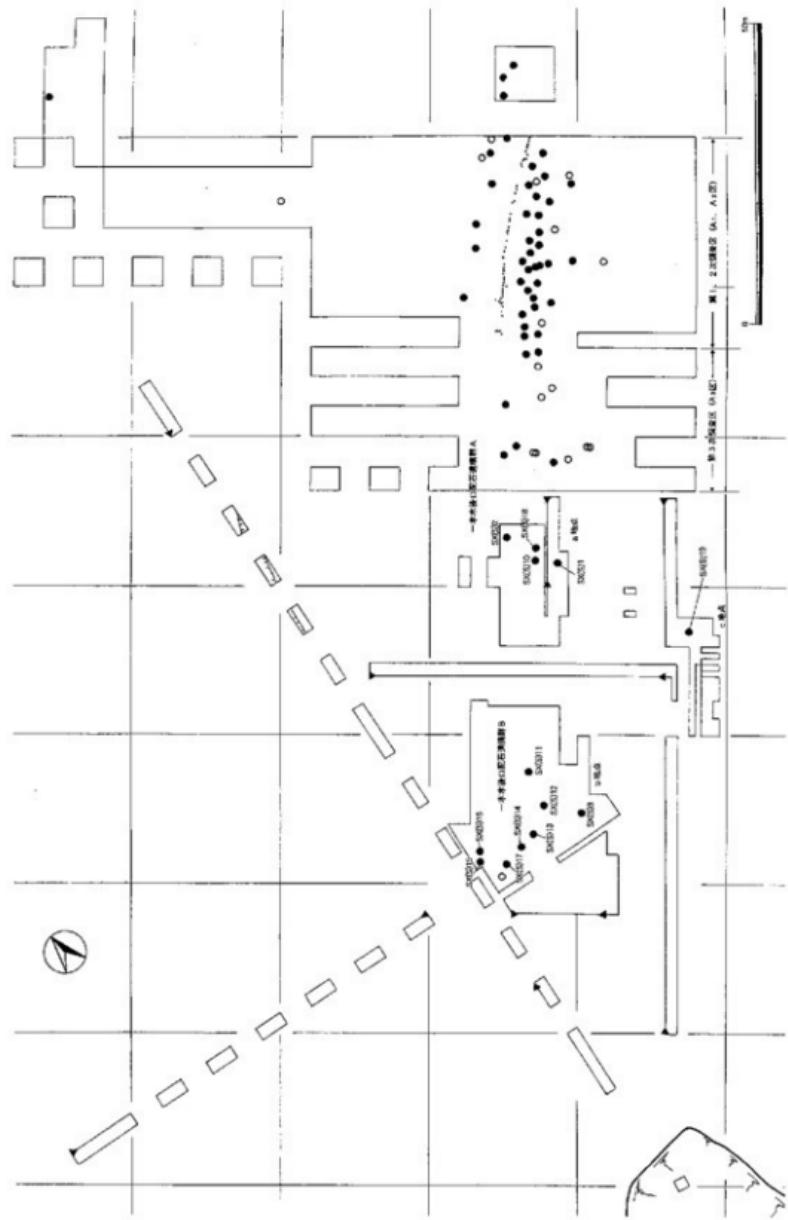
a地点からは、第1、2次調査のA<sub>1</sub>区、A<sub>2</sub>区で確認された弧状列石や外帯部の配石遺構は確認されていない。a地点北西側の未掘部の存在は否定できないが、a地点で確認された配石遺構が1小塊を形成するがその数が少ないと、A<sub>3</sub>区のZD小塊とa地点との間の未掘部分に予想される小塊とも間隔があいていること等から、a地点の配石群はA<sub>3</sub>区の配石群と同様の規則性にあると考えられる。

本配石遺構群の形態、規模等については、来年度に予定している本年度調査地の追調査と配

第2表 一本木後口配石遺構觀察表(1)

配石 No.	表面形状	断面形 状	断面		長方形 面積	赤色 面積	出土遺物	備考
			横幅(m)	高さ(m)				
1 P-10	Ⅲd	I a	1.0	0.62	0.64×1.04×35	0.16	N-5B-E	×
2 Q-10	Ⅲd	I a	0.62	0.62	1.17×0.62×46	0.54	N-5B-E	×
3 R-12	Ⅲd	I a	(1.06×0.93)	0.62	1.06×0.96×72	0.70	N-5E	○ 漆器片
4 R-13	Ⅲd	I b	(1.08×0.66)	0.62	1.01×0.66×70	0.47	N-5E	○
5 R-13	Ⅲd	I a	(1.08×1.00)	0.62	1.08×1.00×75	1.05	N-5E	○
6 R-13-12	Ⅲd	II	(1.06× )	0.62	1.02×1.06×70	1.34		○ 土器片
7 R-12	Ⅲd	II	(1.06× )	0.62	1.07×1.01×22	0.28	N-5E	○
8 R-13	Ⅲd	II	(1.06× )	0.62	1.01×0.92×50	0.55		○
9 R-14-15	Ⅲd	II	(1.06×1.06)	0.62				配石遺物群
10 P-10	Ⅲd	I a	1.15	0.71	1.26×1.15×61	0.43	N-5B-E	×
11 R-10	Ⅲd	I a	1.15	0.65	1.27×1.15×70	0.88		○ 土器片
12 R-10	Ⅲd	I d	(0.95×0.92)	0.62	1.08×1.01×65	0.56	N-5E	○ 金糸紋
13 R-10	Ⅲd	IIb	(1.07×1.02)	0.62	1.48×1.24×47	0.96	N-5D-W	○ 土器片
14 Q-8-9-10	Ⅲd	I c	1.06	0.62	2.06×1.06×53	2.18	N-5B-E	○ 土器片
15 R-9-10	Ⅲd	II	(1.06× )	0.62	1.84×1.04×87	2.04		○ 土器片
16 R-5-6-9	Ⅲd	I b	0.98	0.62	1.06×0.98×52	0.50	N-5E	○ カメ理
17 Q-8-9-10	Ⅲd	I	(0.90×1.00)	0.62	2.23×1.02×72	2.89		○ 破壊断面。土器片
18 R-10	Ⅲd	II	(0.91×1.04)	0.62	1.80×1.14×35	1.09	N-5B-E	×
19 R-5	Ⅲd	II	0.96	0.62	1.76×0.92×36	1.19	N-5W	×
20 R-8-9	Ⅲd	I a	(1.06×1.00)	0.62	1.57×1.08×83	1.16	N-5E	○ 土器片
21 R-5	Ⅲd	I c	(0.95×0.62)	0.62	1.04×1.02×68	1.16	N-5E	○
22 R-5-8	Ⅲd	II	(1.06×1.00)	0.62	1.64×1.15×87	0.91	N-5E	○
23 R-9	Ⅲd	II	1.06	0.62	1.24×1.15×51	0.76		○ 土器片
24 P-8	Ⅲd	I a	(1.06×0.62)	0.62	0.95×0.63×54	0.34	N-5B-E	×
25 R-8-9	Ⅲd	I	1.06	0.62	1.81×1.05×60	1.46	N-5E	○ 土器片
26 S-9	Ⅲd	IIb	1.06	0.62	1.13×1.03×55	0.66	(N-5) D	土器片
27 P-Q-13-15	Ⅲd	I a	(1.06×1.07)	0.62	1.24×1.06×28	0.78	N-5E	○
28 Q-13-14	Ⅲd	I (a)	1.06	0.62	0.90×0.35			○
29 R-7-8	IV上	II	1.06	0.62	1.23×1.02×57	0.88	N-5E	○ 土器片
30 R-7	IV上	IIa	1.06	0.62	1.33×1.09×72	1.34	N-5E	○ (破壊) A. 錦野山部
31 R-6	Ⅲd	II	1.06	0.62	1.02×1.05×61	0.71		○
32 R-12	Ⅲd	I	(0.90×0.62)	0.62	0.96×0.62×44	0.46		×
33 R-5-11	Ⅲd	II	1.06	0.62	1.18×1.06×61	0.58	N-5E	×
34 S-12	Ⅲd	II	1.06	0.62	1.12×1.02×36	0.53	N-5E	○
35 Q-4-5	IV上	I a	(1.06×1.00)	0.62	1.27×1.04×40	0.77	N-5E	○
36 R-5-6-7	IV上	II	1.06	0.62	0.99×0.83×50	0.53	(N-5) D	×
37 R-7	IV上	I	1.06	0.62	1.57×1.17×64	1.18	N-5E	○
38								
39 R-7	IV上	I a	1.06	0.62	0.88×0.62×41	0.54	N-5E	×
40 R-7	IV上	I a	(1.06×1.03)	0.62	1.43×1.05×55	0.93	N-5E	○ 土器片
41 Q-R-4	Ⅲd	I	(1.05× )	0.62	2.79×1.45×57	1.60	N-5E	○ 土器片
42 Q-6	IV上	II	1.06	0.62	1.06×0.96×55	0.45	20-27-E	×
43 R-2	Ⅲd	Ec	1.06	0.62	1.03×1.04×35	0.38	N-5E	×
44 S-3	Ⅲd	I a	(1.06×1.05)	0.62	1.18×1.05×66	0.50	N-5E	○ 土器片
45 R-6	IV上	II	1.06	0.62	1.13×1.02×25	0.76	(N-5) D	○ 土器片

※ 第9号配石遺物は一本木後口配石遺物群に収録する。



第3表 一本木後口配石遺構観察表(2)

配石	確認地点	確認番	形状				大きさ		表面の内 凹凸	表面 色調	出土遺物	備考
			形態	幅(単位) cm	厚(単位) cm	高さ(単位) cm	底面積(単位) cm <sup>2</sup>					
4-1	B-140	2号下段 Ⅱa類	Ia	122×20	標準形	122×8	×65	—	N-55W	なし	なし	一本木後口A トレンチ標
4-2	Q-143-147	3号下段 Ⅲa類	—	—	標準形	—	—	—	—	なし	なし	一本木後口B 未記
4-3	T-132	4号下段 Ⅳa類	Ia	125×32	標準形	—	—	—	N-71E	—	なし	一本木後口B 未記
4-10	R-140	5号下段 Ⅴa類	Ib	73×59	非標準	—	—	—	N-48W	—	なし	一本木後口A トレンチ標
4-11	Q-138	6号下段 Ⅵa類	IIa	—	非標準	—	—	—	—	なし	なし	一本木後口B 未記
4-12	Q-135	7号下段 Ⅶa類	Ib	120×32	非標準	—	—	—	N-15E	—	なし	一本木後口B 未記
4-13	Q-131	8号下段 Ⅷa類	Ia	120×37	非標準	—	—	—	N-91E	—	なし	一本木後口B 未記
4-14	Q-131	9号下段 Ⅸa類	Ia	140×50	非標準	—	—	—	N-72W	—	なし	一本木後口B 未記
4-15	P-138	10号下段 Ⅹa類	Ia	125×35	非標準	—	—	—	N-18E	—	なし	一本木後口B 未記
4-16	P-130-131	11号下段 Ⅺa類	Ic	165×50	非標準	—	—	—	—	なし	なし	一本木後口B 未記
4-17	Q-120	12号下段 Ⅻa類	Ia	79×60	背凸 標準形	88×72X	—	—	N-6W	—	なし	一本木後口B 未記 下部土孔についてはプランを複数
4-18	R-141	13号下段 Ⅼa類	—	—	非標準	—	—	—	—	なし	なし	一本木後口A 未記
4-19	W-138	14号下段 Ⅽa類	Ia	120×40	非標準	—	—	—	N-14W	—	なし	一本木後口A 未記 斜面50年後643mにあたり

※ 色調判定は、下部土孔充填のため配石運搬の最終方向とした

石遺構群北東側隣接地の調査結果を加え、再度考察したい。

## 一本木後口配石遺構群B

b 地点で確認された配石遺構は8基で、同地点中央から西部にかけて分布している。北側や南側に広がることはない。西側にも小沢があり大きく広がるとは考えられない。配石の配置について環状や弧状、直線的といった規則性も考えられない。

配石遺構の形態については、I a類が5基、I b類あるいはI c類と考えられるもの、I c類、II a類と考えられるものが、それぞれ1基である。

このようなことから、b 地点の一本木後口配石遺構群Bは、これまでの環状列石や配石遺構群とは形態が異なり、径20m程の範囲に群集する配石遺構群と考えられる。 (秋元信夫)

## 2. 道路状遺構について

### (1) 道路状遺構の構造と規模

これまでの調査によって、道路状遺構と判断された場所は5ヶ所である。この発見状況と構造・規模を列記する。

A1区 第1次発掘調査、県道に近いB-13~15、C-12~16グリッドに位置する。基本層序II b層直下より非常に固く絞まつた赤みを帯びた暗褐色土を確認した。硬く絞まつた部分を移植ペラで叩くと金属音がするほどであった。

道路状遺構は三叉路となっており、その幅は2m~3.5mを測る。

A4区 第5トレンチ東端(N-129グリッド)、第4トレンチ北寄り(H-1143・I-140・J-138グリッド)で確認された。いずれの地点も、基本層序II b層直下に非常に硬く踏み固められた赤味を帯びた暗褐色土を確認した。

B2区 野中堂環状列石の南東側隣接地Q-93グリッドを中心に南北に延びた轍を確認した。轍は地山まで達し、長さ約25m、幅3.5mを測る。

A-25 大湯ストーンサークル館排水施設設置に伴う調査によって確認した。基本層序II b層直下で非常に硬く絞まつた暗褐色土を確認した。幅3.7mを測る。

### (2) 巡検使道・旧道と確認された道路状遺構

巡検使とは「將軍が変るたびに幕臣三人一組となつて諸国へ派遣され、藩政や民情を視察」することを目的としていた。江戸時代に街道が整備された要因としては、この巡検使の下向があつたと言われている。

鹿角市内を通る街道としては、鹿角街道、来満街道、濁川街道がある。鹿角街道は大館市早口岩瀬付近で羽州街道から分岐して板沢、仁井田、栗田、十二所を経て南部領に入り、松ノ木、花輪、田山を抜け盛岡へ通じる街道である。来満街道は、松ノ木から分岐して毛馬内・大湯を抜け青森県三戸に通じる脇街道、さらに濁川街道は、毛馬内から分岐して小坂を抜け青森県碇ガ関村に通じる脇街道である。

これらの主要街道のほかに「奥州南部領図十郡(注1)」には各村々を結ぶ脇街道が描き出されており、花輪から大湯に通じる往来も記されている。この往来は花輪を出、乳牛、柴内、小平を抜け、大湯環状列石の南側約500mに位置する「猿賀神社」の脇を抜け大湯に至る道筋である。

『鹿角市史第Ⅱ巻下』によると「即ち前日の宿泊地三戸郡関村を出立し、来満山中、大柴峠を越え折戸から鹿角郡大湯へ入るを例とした。大湯宿泊の翌日、數珠かけ地蔵堂のあった在郷坂を上がり宮野平村、倉沢村などの中通台地へ出、野中観音堂の前を猿ヶ野村へ至った。ここから低地に下り浜田村を通り、古川村錦木塚に御茶屋を設けて休息した」という記載があり、

さらにこの道筋を「天下道」と称したことも書き添えられている。

記載されている在郷坂は、大湯市街地から大湯環状列石へ通じる県道の一部となっており、二本柳へ向かう交差点の路肩には一里塚（市指定）が残されている。また、宮野平村・倉沢村はこの在郷坂より大湯環状列石へ向った現在の宮野平・倉沢集落であり、野中観音堂は地名から野中堂環状列石南側に鎮座する「駒形神社」、猿ヶ野村は現在の「申ヶ野」地区である。

これから推察すると、この「天下道」は野中堂環状列石の隣接地、「駒形神社」の前を過ぎ猿ヶ野村へと続いていることが解る。

第46図は、明治後半に作成された地籍切絵図、昭和50年に作成した地形図、これまでの発掘調査の成果を重ね合わせていった図である。

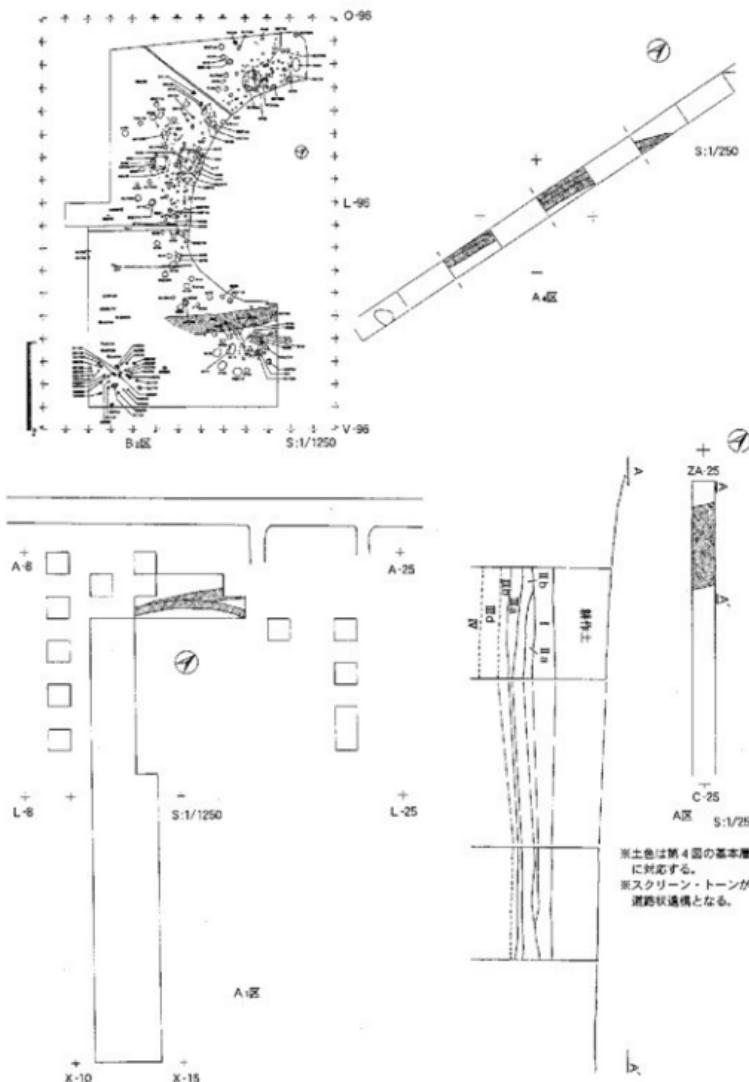
市史に見られる「天下道」と称する道筋は、名称が示すように明治後半でも主要な道筋であり、赤線で太く示されているものと推定される。その道筋は、野中観音前、野中堂環状列石南東側、現在の大湯ストーンサークル館隣接地を抜け、一本木集落・倉沢集落に続いていたものと推察され、その位置から野中堂環状列石南東側で確認された道路状遺構はまさしく、この「天下道」といってよいものといえる。

では、第46図で示した青線は何を意味するのであろうか。A<sub>5</sub>区（第22次調査）で二ヶ所、A<sub>1</sub>区（第1次調査）、さらに大湯ストーンサークル館排水施設設置に伴う試掘調査で、大湯浮石層直下が非常に固く踏みしめられた場所が確認された。これを結んでいくと緩やかなカーブを描き、その道筋は野中堂環状列石の南東側隣接地で「天下道」と合流するか、もしくは沢に沿って台地縁辺まで延び台地縁の細い道筋に合流する可能性がある。

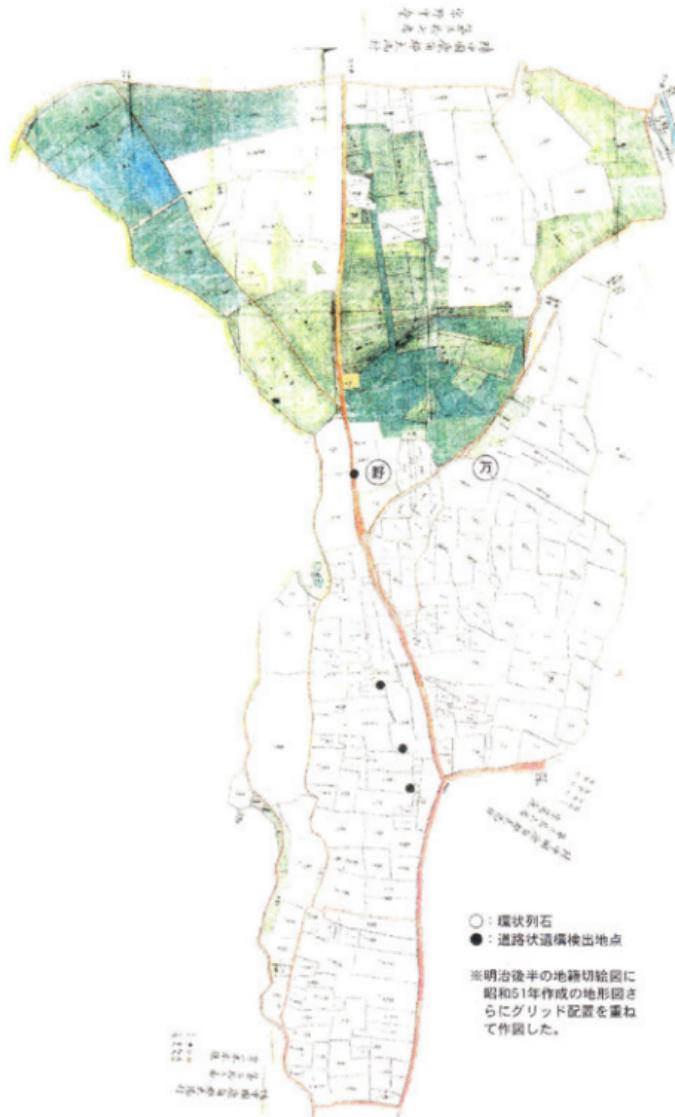
しかし、この道筋は、明治後半の地籍切絵図には示されてはおらず、明治後半には廃棄されていたことが切絵図から読み取ることができる。この道筋が使用された時期については、その確認面から大湯浮石層直下であること、さらに大湯浮石層は史跡全般で見られるようなノーマルな堆積状況でこの場所を覆っていたことから大湯浮石降下以前まで使用されていた可能性があり、その所産は平安時代前半の頃まで遡ることが可能である。

（注1） 南部藩では正保二年に領内絵図を書き上げているが、元禄十年に幕府の命により改定し、同十二年に再度書き上げている。この絵図は、盛岡市中央公民館所蔵の正保四年と元禄期の絵図との比較から、元禄期のものを書き写したものと考えられる。絵図には藩境、郡名、村名、街道、脇街道、一里塚や要所所にはその土地で起こった事件が記され、元禄期の南部領の実態を最も正確に伝えている。この絵図は、藩境の守備のため配置された盛岡藩譜代であった大湯北氏に与えられたものと考えられる。平成12年に市指定有形文化財に指定されている。

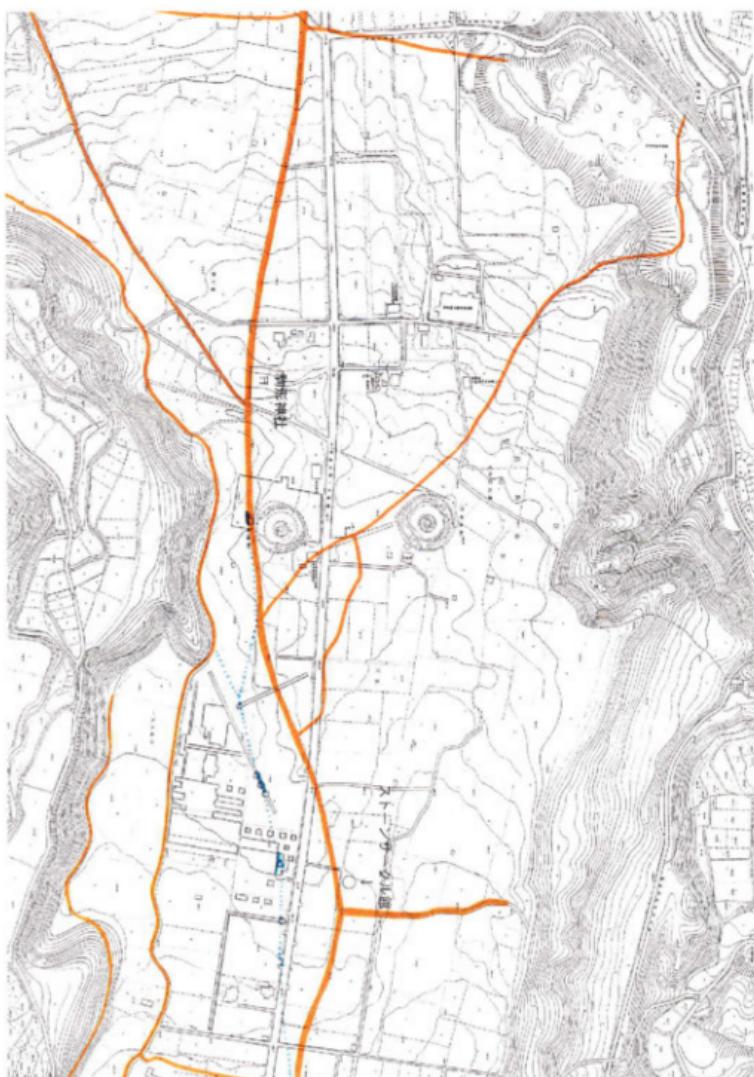
（藤井安正）



第44図 道路状況構実測図(2)



第45図 大湯環状列石周辺の地籍切絵図



※地形図、調査グリッド配置図、地籍切絵図  
をもとに作図した。

赤：明治後半の赤道  
黄：新たに発見された古道  
(一部推定)

第46図 大湯環状列石周辺の古道

## 第VI章 調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯字万座、野中堂、一本木後口に所在し、万座、野中堂の2つの環状列石を中心とする大規模な「マツリと祈りの場」として縄文時代後期前葉から中葉にかけてつくられた遺跡である。これまでの調査で、万座・野中堂の2つの環状列石と一本木後口配石遺構群などの大規模な遺構が検出されているほか、配石遺構・建物跡などの遺構が多く検出されている。

今年度の調査区は史跡の北東部で、周辺には昭和59年からの第1次～3次調査で一本木後口配石遺構群が確認されている。今年度の調査区であるA<sub>4</sub>区、A<sub>5</sub>区は、この一本木後口配石遺構群の南西側隣接地にあたることから、配石遺構群が本調査区にのびて分布する可能性が十分に考えられていた。このことから、今年度の調査は、一本木後口配石遺構群が南西側に分布するのか、その分布状況の確認を行うことを主な目的とし調査を行った。また、調査区の南端には湧水地があることから縁辺部における縄文時代の遺構の有無を確認した。

調査の結果、A<sub>4</sub>区で確認された遺構は配石遺構13基、土坑1基、焼土遺構40基、道路状遺構1条であり、A<sub>5</sub>区で確認された遺構は焼土遺構1基であった。

調査区の地形については、主に南側の沢に向かって下っていることが確認された。しかし、その傾斜は予想していたよりも緩やかであり、配石遺構周辺ではほぼ平坦となっている。また、南端に存在する湧水地周辺からは焼土遺構が検出されている。木の根などによる搅乱が激しく、縄文時代の層が残存する区域は少ないが、縄文時代の人々が利用した痕跡を確認することができた。

配石遺構はA<sub>1</sub>～A<sub>3</sub>区との隣接部にあたる調査区北東部a地点と調査区中央部b地点で確認されている。a地点の配石遺構については一本木後口配石遺構群の一部であると考えられるが、b地点の配石遺構については一本木後口とは異なる形態の配石遺構群である可能性が高いと考えられる。(第V章1参照)しかしながら、調査が不十分であったこともあり、各配石遺構の下部土坑について、また配石遺構群の分布について十分な成果をあげることができなかつた。

来年度調査区は一本木後口配石遺構の北東側への分布状況の解明を目的とする調査を行う予定である。今年度の成果とあわせて、一本木後口配石遺構群の姿を明らかにできるよう、下部土坑や弧状列石の有無、小塊の存在などの課題についても調査を行いたい。(三浦貴子)

## 参考文献

- 鈴木克彦 『北日本の縄文後期土器編年の研究』 雄山閣 2001年
- 成田滋彦 「青森県の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』雄山閣 1981年
- 高橋忠彦 「秋田県の縄文時代後期の土器」『研究紀要』第4号  
秋田県埋蔵文化財センター 1989年
- 秋田県 「秋田県総合地質図幅 花輪」 1973年
- 秋田県教育委員会 「西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI  
—高屋館跡—」 1990年
- 秋田県教育委員会 『圃場整備地域内遺跡分布調査報告書』 1979年
- 十和田町教育委員会 『黒森山麓縄文期整穴群』 1971年
- 鹿角市教育委員会 『下内野II遺跡』 2000年
- 鹿角市教育委員会 『秋田県鹿角市遺跡詳細分布調査報告書』 1990年
- 鹿角市教育委員会 『下砂沢遺跡発掘調査報告書』 1990年
- 文化財保護協会 『大湯町環状列石』 1953年
- 鹿角市教育委員会 『昭和50年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』 1976年
- 鹿角市教育委員会 『昭和51年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』 1977年
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』(1)~(6) 1985年~1990年
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石発掘調査報告書』(7)(8) 1991年、1992年
- 鹿角市教育委員会 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』(9)~(11) 1993年~2005年
- 鹿角市教育委員会 『特別史跡大湯環状列石(1)』 2005年
- 鹿角市 『鹿角市史』第II巻下 1987年



PL1 大溫環狀列石(1)



写真中央に県道を挟み、野中堂環状列石と万座環状列石がみえる。平成14年撮影  
写真左下が本年度の調査区

PL2 大湯環状列石(2)



第4 トレンチ



第5 トレンチ

PL3 調査区近景(1)



第6 トレンチ

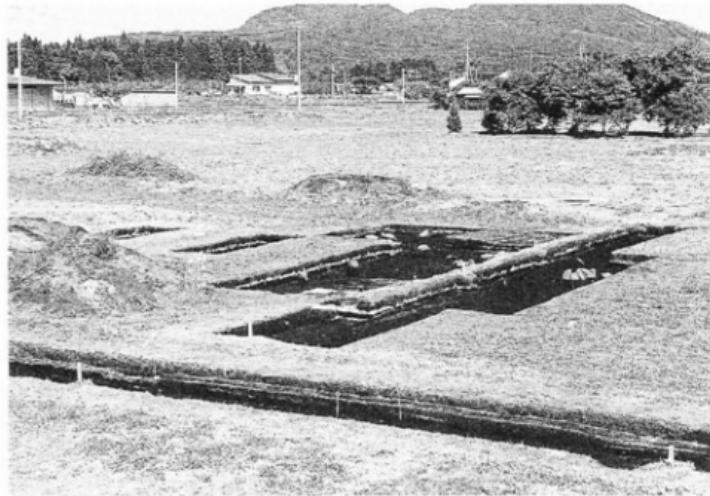


第7 トレンチ・調査c地点

PL4 調査区近景(2)



調査 a 地点



調査 a 地点・第 2 トレンチ

PL5 調査区近景(3)



調査 a 地点近景

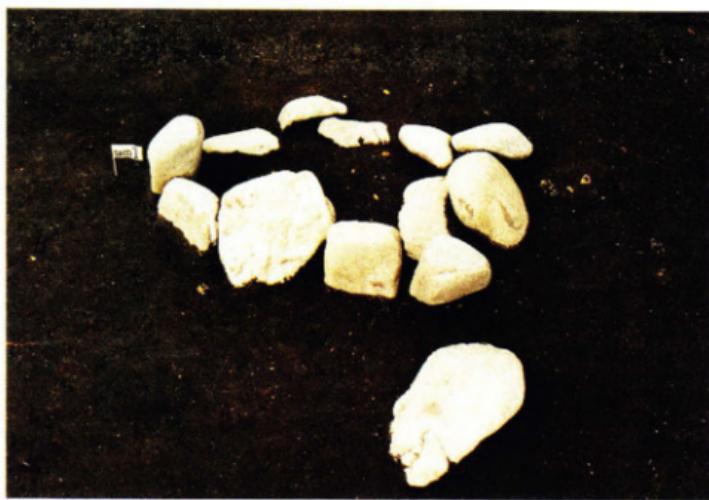


調査 b 地点

PL6 調査区近景(4)



SX(S)01



SX(S)01

PL7 配石遺構(1)



SX(S)01

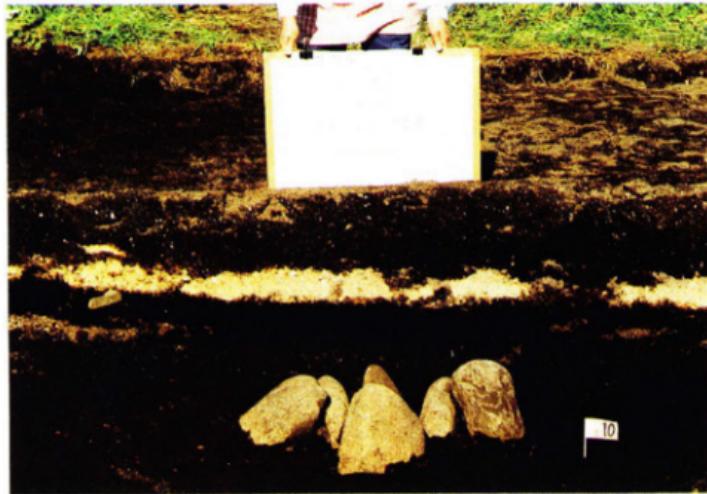


SX(S)02

PL8 配石遺構(2)



SX(S)03



SX(S)10

PL9 配石遺構(3)

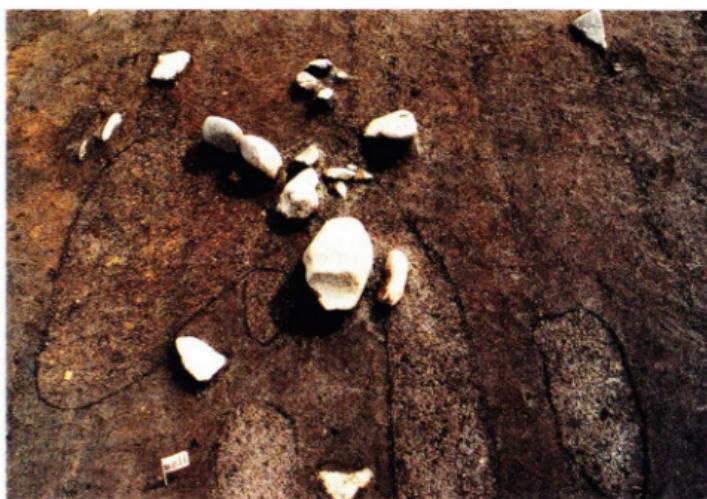


SX(S)10

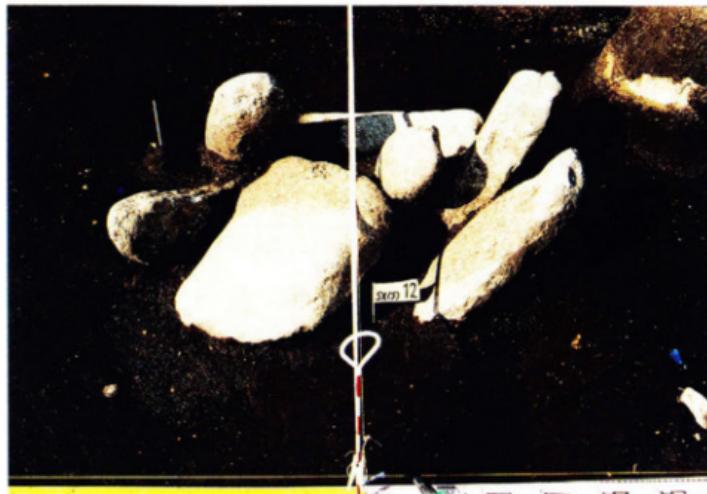


SX(S)10

PL 10 配 石 遺 構(4)



SX(S)11



SX(S)12

PL11 配石遺構(5)



SX(S)12



SX(S)13

PL.12 配石遺構(6)



SX(S)13



SX(S)14

PL.13 配石遺構(?)



SX(S)14



SX(S)15

PL.14 配 石 遺 構(8)



SX(S)15

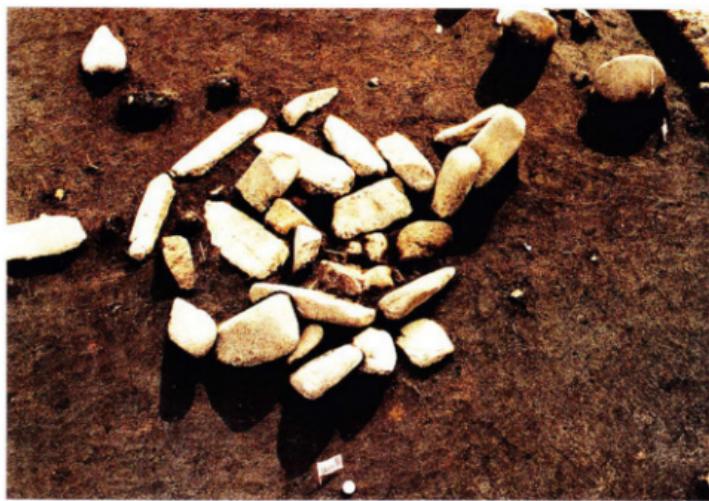


SX(S)16

PL15 配石遺構(9)

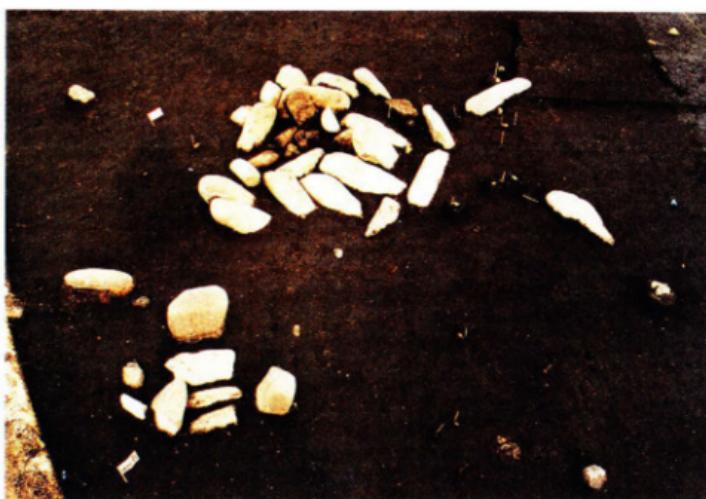


SX(S)16



SX(S)16

PL16 配石遺構(10)

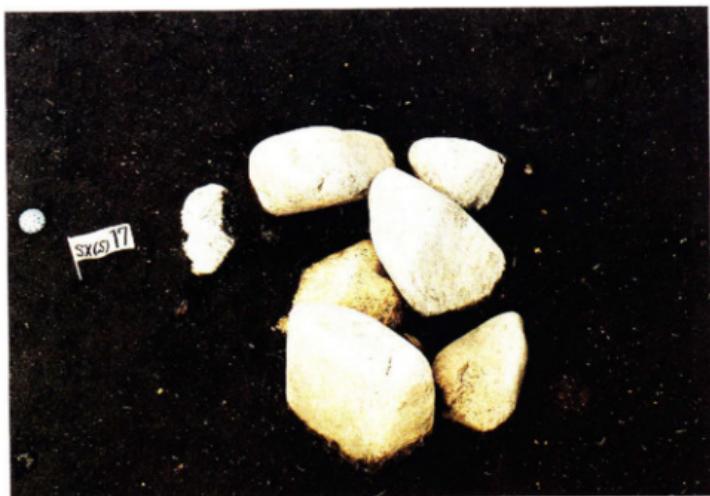


SX(S)15 - 16



SX(S)17

PL.17 配 石 遺 構(11)

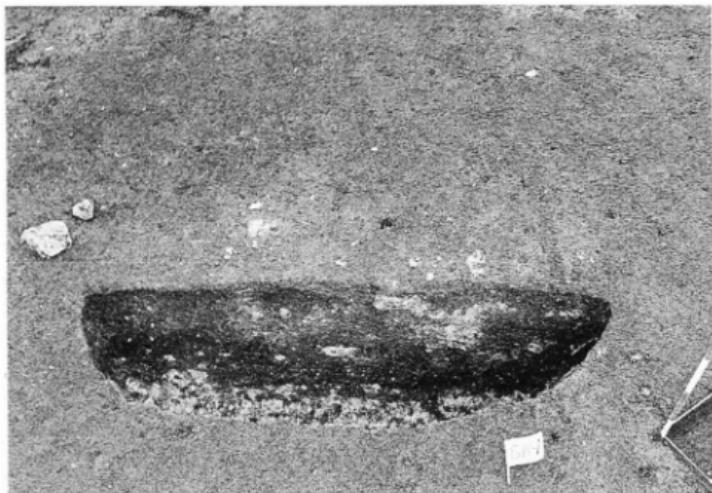


SX(S)17

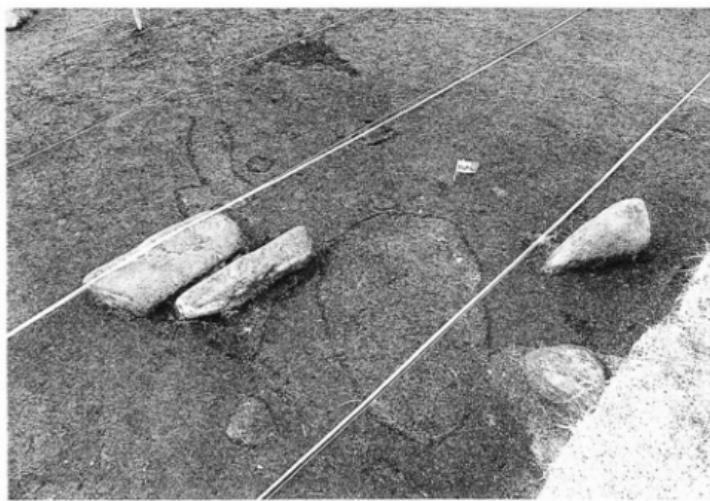


SX(S)18

PL18 配 石 遺 構(12)

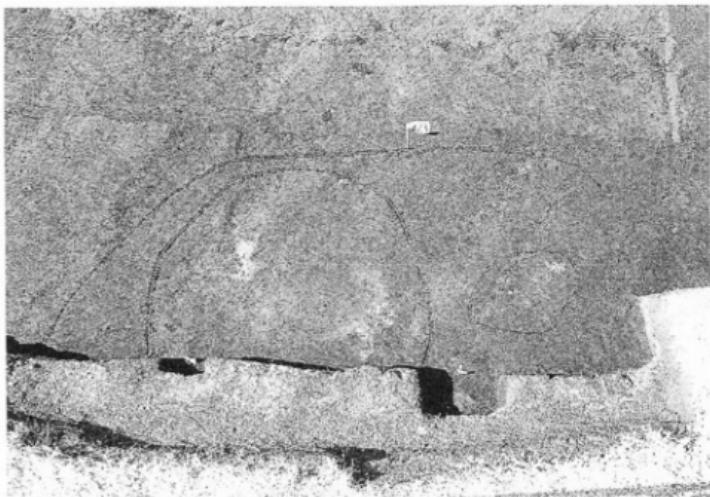


SK01

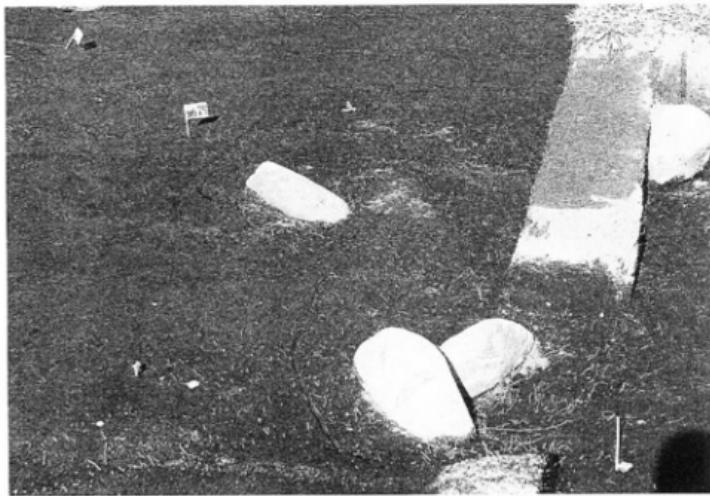


SX(f)18

PL.19 土坑・焼土遺構(1)



SX(f)23

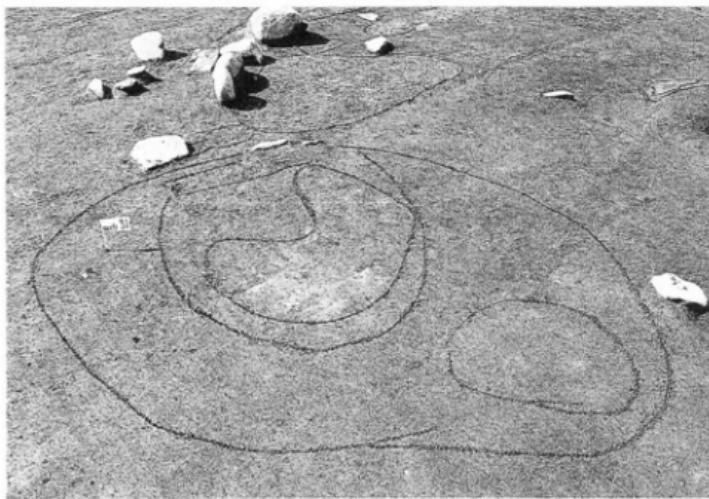


SX(f)24

PL20 燃 土 遺 構(2)



SX(f)26



SX(f)31

PL21 烧 土 遗 槽(3)



SX(f)32



SX(f)33

PL22 烧 土 遗 槽(4)

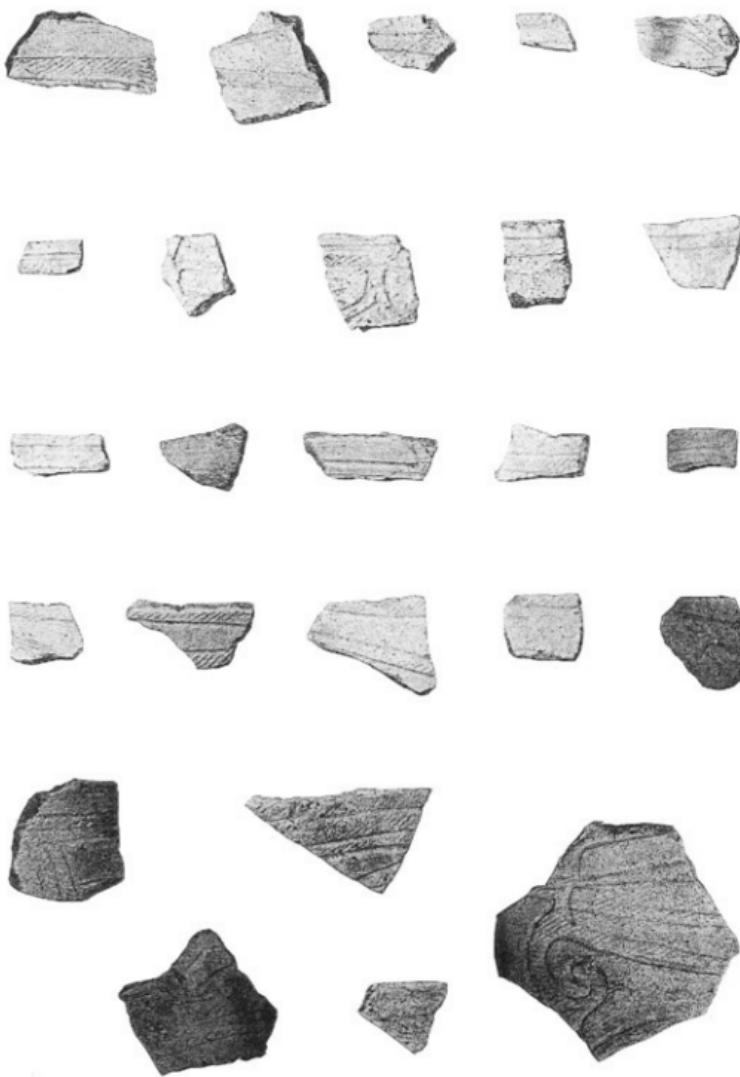


SX(f)43

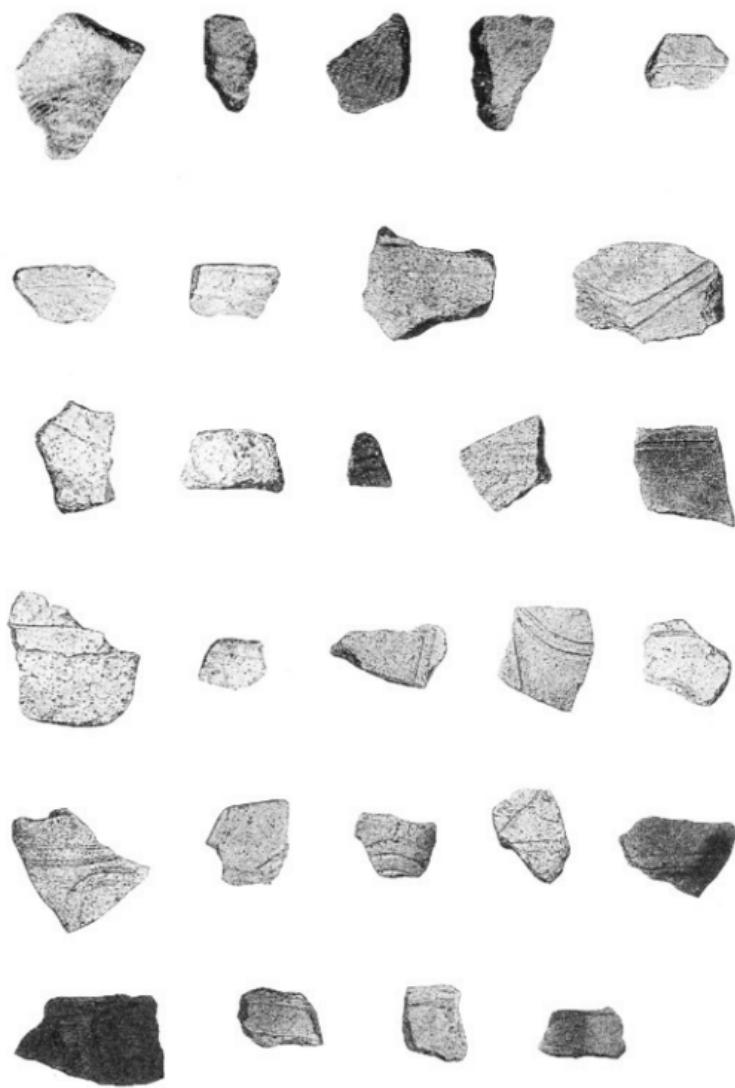


SM01

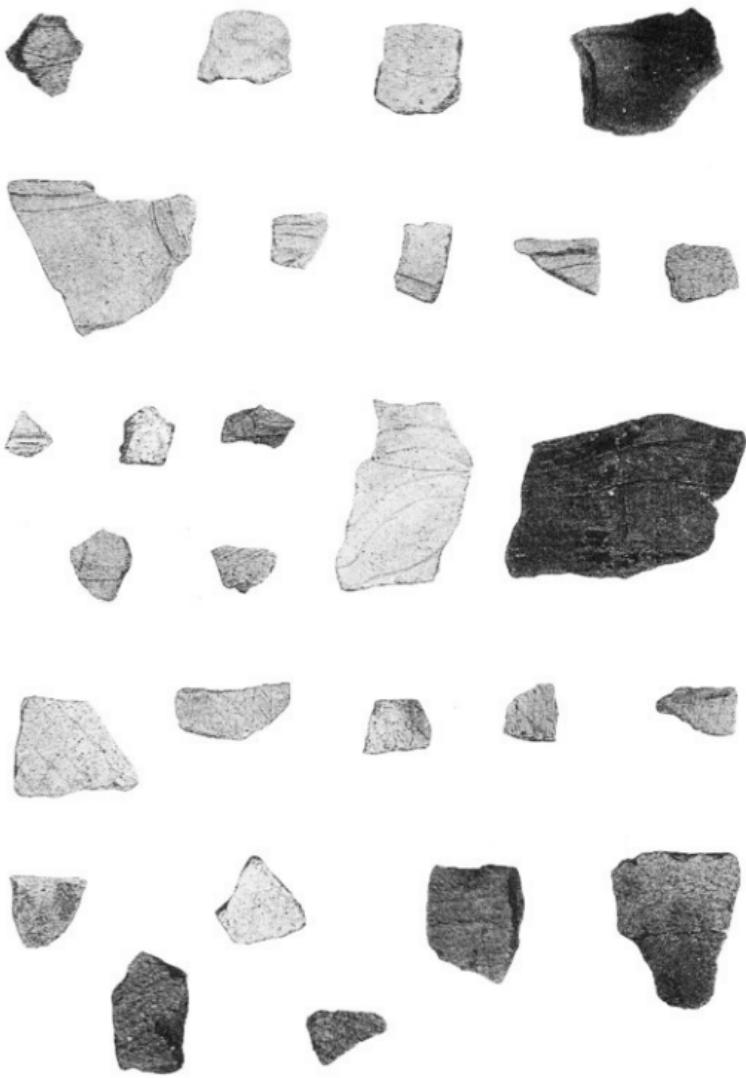
PL23 烧土遗構(5)・道路状遗構(1)



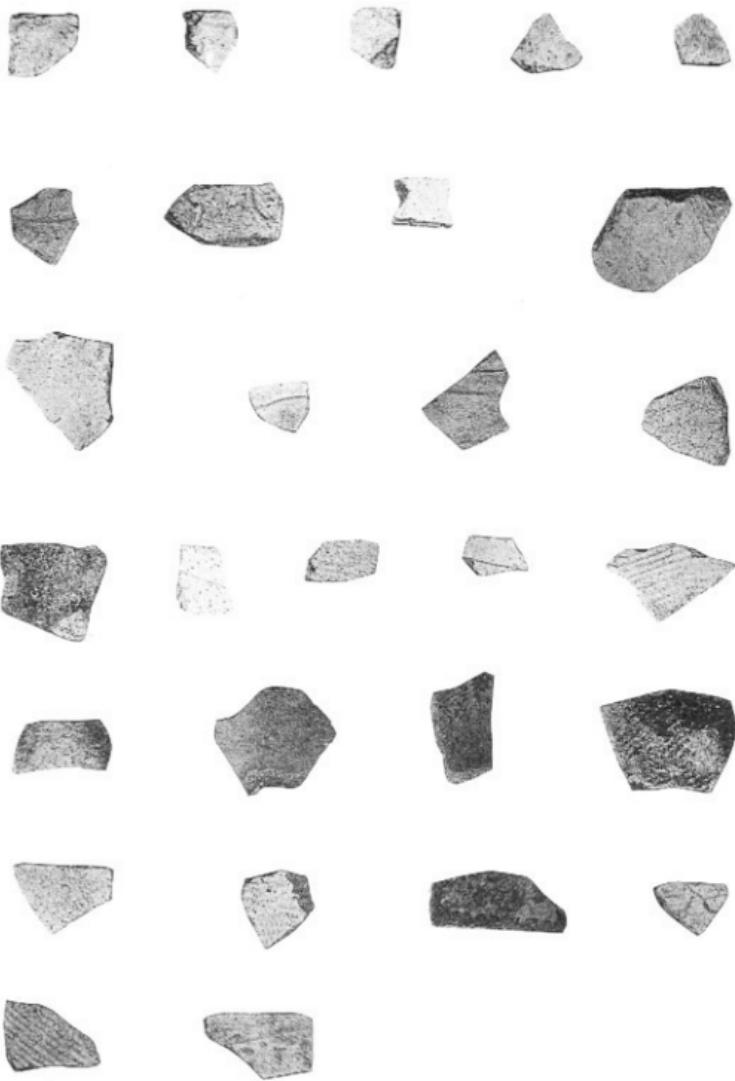
PL24 出 土 土 器(1)



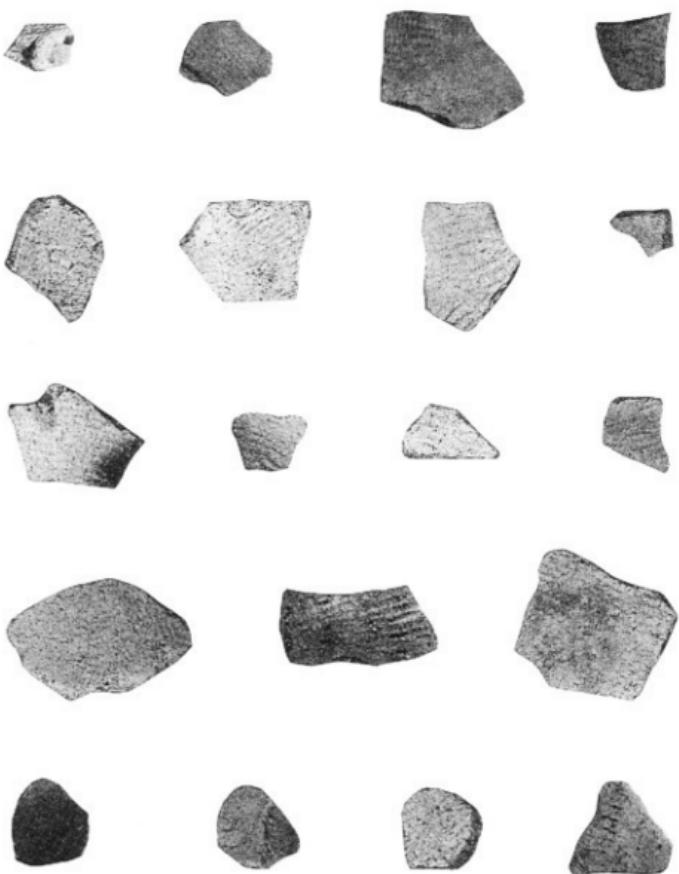
PL25 出 土 土 器(2)



PL26 出土土器(3)



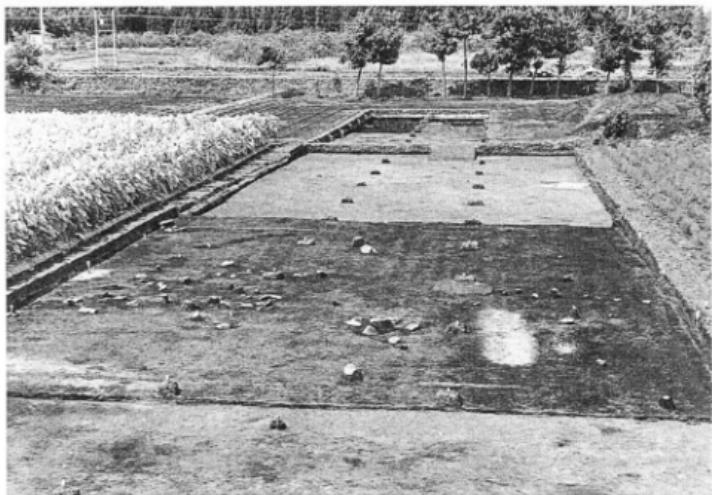
PL27 出 土 土 器(4)



PL28 出土土器(5)・土製品



PL29 出土土器



A 1区配石遺構分布状況



A 1区配石遺構分布状況

PL30 昭和59年度調査区(A 1区)



A 2 区配石遺構分布状況



A 2 区配石遺構の下部土坑

PL31 昭和60年度調査区(A 2 区)

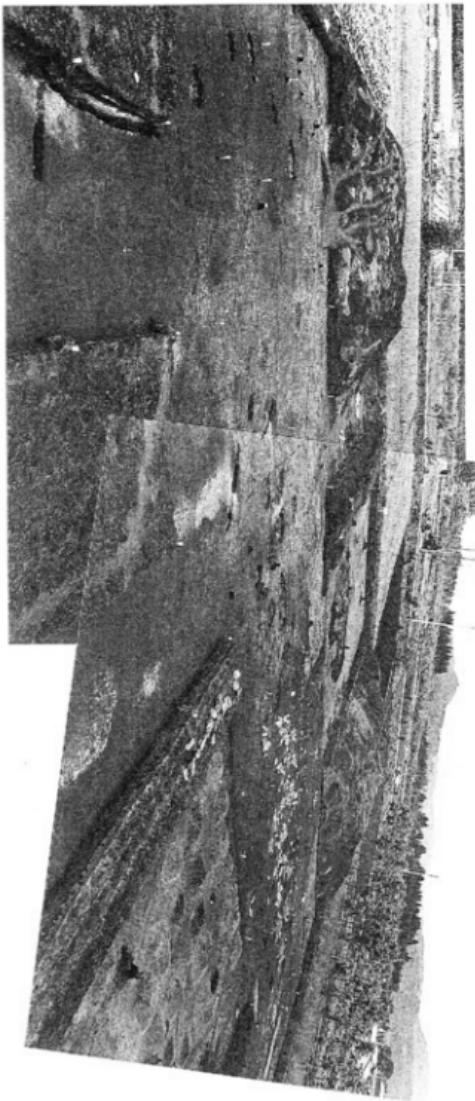


A 2区・3区配石遺構分布状況



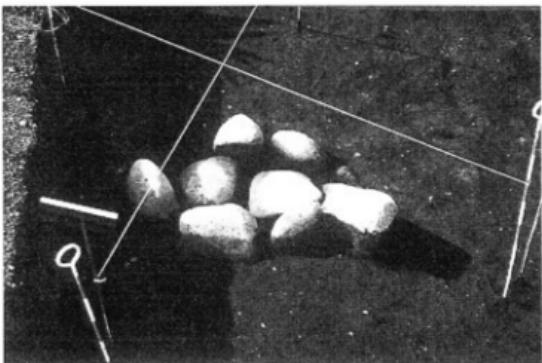
A 2区・3区配石遺構分布状況

PL32 昭和60年・61年度調査区(A 2区・3区)



PL33 一本木後口配石遺構群(1)

SX(S)01



SX(S)01



SX(S)02



PL34 一本木後口配石遺構群(2)

SX(S)02



SX(S)03

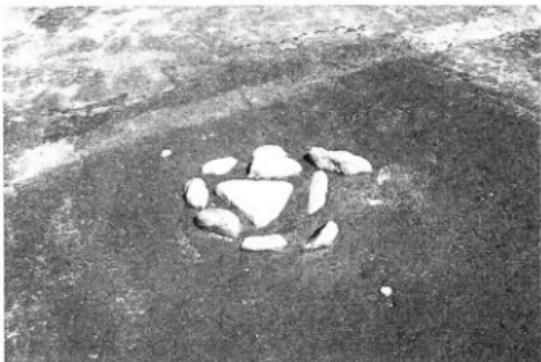


SX(S)03



PL35 一本木後口配石遺構群(3)

SX(S)10



SX(S)10



SX(S)11



PL36 一本木後口配石遺模群(4)

SX(S)12



SX(S)12



SX(S)12



PL37 一本木後口配石遺構群(5)

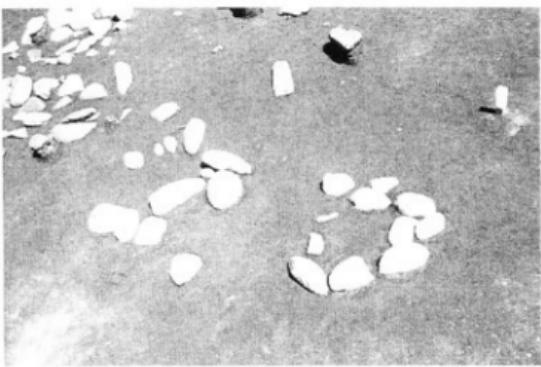
SX(S)14



SX(S)14



SX(S)16



PL38 一本木後口配石遺構群(6)

SX(S)16

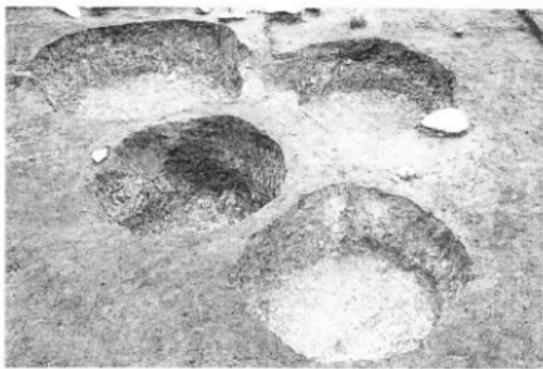


SX(S)17



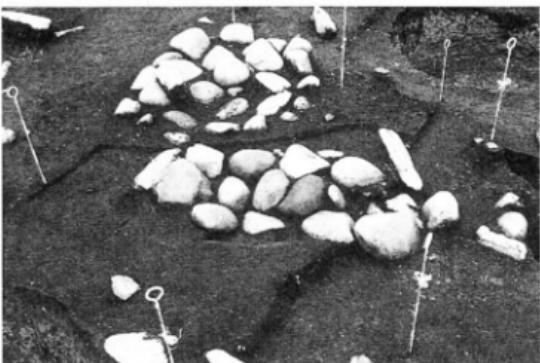
SX(S)17·20·21·25

下部土坑



PL39 一本木後口配石遺構群(7)

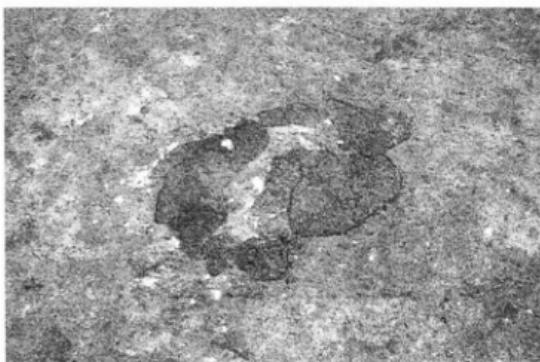
SX(S)14・18



SX(S)18

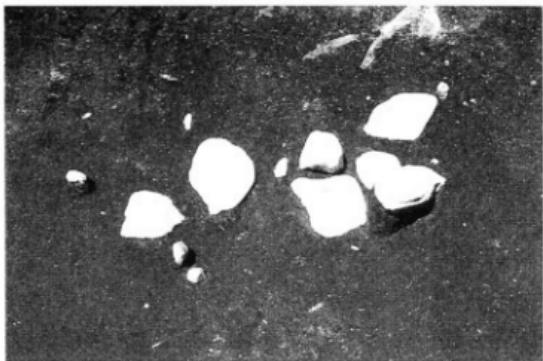


SX(S)35

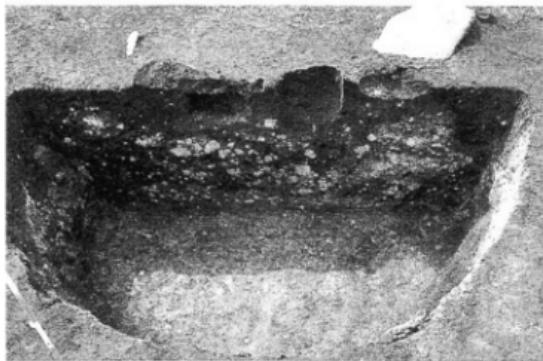


PL40 一本木後口配石遺構群(8)

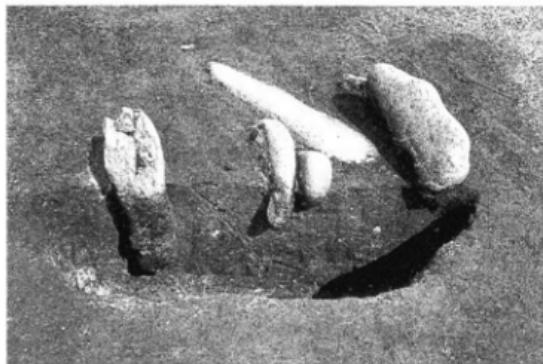
SX(S)41



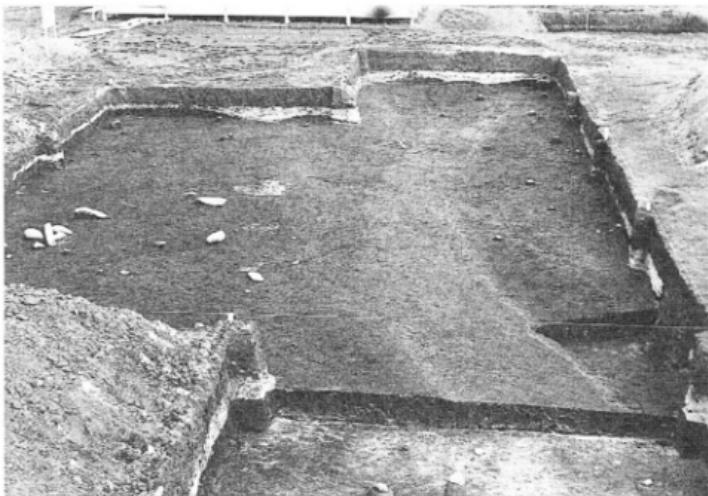
SX(S)41



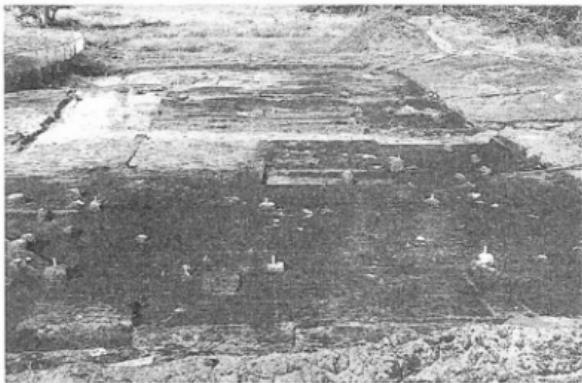
SX(S)43



PL.41 一本木後口配石造構群(9)



A 1区の道路状遺構



B 2区の道路状遺構  
野中堂環状列石の南東側に2本の「ワダチ」がみえる。

第42図 道路状遺構(2)

## 報告書抄録

ふりがな	とくべつしきき おおゆかんじょうれっせき はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	特別史跡 大湯環状列石 発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料							
シリーズ番号	85							
編著者名	鹿角市教育委員会（生涯学習課）							
編集機関	鹿角市教育委員会（生涯学習課）							
所在地	〒018-5292 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市十和田大湯字万座字野中堂字一本木後口	05209	123	40度 16分 21秒	140度 48分 50秒	2005.8.10 5 2005.11.14	合計 1,546.79m <sup>2</sup>	環境整備事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
特別史跡 大湯環状列石	環状列石	縄文時代後期	縄文時代 配石遺構 焼土遺構 土坑 歴史時代 道路状遺構	縄文土器(後期) 石器		万座・野中堂環状列石を中心に広がったマツリと祈りの場。 平成10年度より環境整備が行われ、縄文時代の精神文化を感じることができる。併設されている大湯ストーンサークル館では史跡の解説のほか、体験学習や講座が行われている。		

---

鹿角市文化財調査資料85

**特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(22)**

発行年月日 平成18年3月31日

発 行 者 鹿角市教育委員会

〒018-5292

秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1

電話 0186-30-0293(生涯学習課直通)

印 刷 所 株式会社 米代新報社

---